

---

# ダブルアタック！

MMR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダブルアタック！

### 【Nコード】

N8801J

### 【作者名】

MMR

### 【あらすじ】

シスターアタック第2幕。実妹の無邪気なアプローチ？ に加え、その親友ともハプニングを交えた出来事が起こっていく、もはや日常とは言えなくなってきた日々を描くお話。

## 1 ダブルアタック！

俺、高坂雄斗こうさかゆうとは今、刺激的なシチュエーションの中にいた。  
だって、そうだろう？

寝起きから、俺の眠っているベッドの上、ひいては俺の腹の上の  
布団越しに、二人の女子高校生が乗っかっているなんて、普通では  
考えられない。

「おにいちゃん、るりちゃんのことばかり見てる……あうあう、わ  
たしだって負けないんだからね？」

「どう考えても妹の発言じゃないなそれ」

俺から見て左側にいるのが、実の妹である高坂美央こうさかみお。

俺の一つ下の学年で、高校一年生だ。

高校生にもなれば、兄妹はそれほど仲良くいることはないと一般  
では言われているはずなのだが、なぜか美央に限っては、むしろ高  
校生になってからますますくっついてくるようになっていく。

時々今のように危ない発言をしたり、休みの日には引っぱり回さ  
れたり、美央には手を焼いている。

最近では俺も、こんな美央でも彼氏ができたらどうなるのかなん  
てことを考えて、意識してしまう自分がいたりする。

いや、決して手を出そうとなんて考えているわけではない。そう、  
いわゆる兄妹愛というやつなのだ。

……言ってて気持ち悪くなった。

「お兄さん、あの、いつまでも寝ていると時間なくなりますよ……」  
「とりあえず、そう思うなら俺の上にずっと乗らないでくれるとあ  
りがたいんだけどな、鴨紅さん」

右側にいるのは、鴨紅<sup>かもく</sup>るりさん。美央のクラスメイトだ。もちろん高校一年生ということになる。

鴨紅さんは美央と大親友ということになっている。あくまで美央の言うことだけを取れば、だが。

彼女はあまり主張するようなタイプではないため、無理矢理美央に振り回されている可能性がある。だから本当に大親友と信じていいのか怪しいのだ。

しかし家に遊びに来るのを時々見ているので、少なくとも仲がいいというのは間違いないと思う。たぶんだが。

ただ、さすがに俺の上……もとい、そもそも俺の部屋に乱入してくるのは初めてのことだった。

いったい、なぜ？ その疑問ははまだ晴れていないが、とにかく朝から余計な頭を使いたくはなかった。

ただ言えるのは、これから大変な毎日が待っているのではないかということ。

「えへへ、美少女二人にこうして起こしてくれるなんて、嬉しいでしょう？」

自分で美少女とか言ってしまうのかよ……美央の発言から早くも、「大変な毎日」の一端が垣間見えたような気がした。

## 2・アタックの理由

俺が部屋を出て、階段を下りリビングへ顔を出すと、母親が細く冷たい目をしながら、黙って俺に視線をよこしていた。

とても息子を見るようなものとは思えない。

「な、なんだよ母さん」

もともと美央に甘く、差別だと認識できるほど俺を放置している母親なのだが、今日は特に黒いオーラみたいなものが漂っているように見えた。

「ついに、警察に届けないといけない時がきてしまったようね」

「は？」

いや、なんですかそのわざとらしいため息は。

「実の妹だけでも許しがたいのに、その友達の女の子まで手の内に収めてしまうなんて……どれだけ鬼畜なのよ」

この母親は……俺を犯罪者とも思っているのだろうか。何か口でもない行動を俺の部屋でしていたとも思っているらしい。

そもそもずっと朝食の支度や洗い物で下にいたんだろうから、見たのは美央と鴨紅さんが俺と同時にリビングの方に下りてきたところだけのはずなのだ。それだけで俺が何かしたと結論づけるのはいかななものかと思う。

監視カメラでも仕掛けて俺の部屋を覗いていなければ、の話だが。いや、やりかねない。その目の奥が座った様子を見ると、本当にやりかねない。

しかし、監視されたところで何もやましいところはない。何も焦る必要はない。

「いや、手の内に収めるとか、そもそも美央にも何もしてないわけだし」

「部屋に連れ込んでおいてよくもそんなことが言えるわね」

「勝手に入ってきたんですけど」

基本的に母親は俺の言うことなど信用しない。本当にこの家庭はどうなっているのか。

信用しないどころか警察に届けると言い出すなんて、冗談にしても笑えない。

「……つまんないわね」

それは俺が話に乗ってこないことにですか、それとも考えていることが当たらずに行動に起こせなかったからですか。

少なくとも前者であって欲しいと願うが、確認するのが怖い。余計なことは聞かないことにした。

「あの、お兄さん。私、二人が準備できるまでお兄さんの部屋で待っていますね」

「あつ、そうやっておにいちゃんの部屋をてってーてきに調査するんだね！ るりちゃん、やるー」

「は、はうつ……そんなことするつもりで言ったんじゃないってばあ……」

こっちはこっちで、母親の火に油を注ぐようなこと言ってるし。それに、そもそもなんで俺の部屋なんだ。

「あの、鴨紅さん？ 美央の部屋で待っててくれないかな？ 鴨紅さんがいると着替えられない」

「はわわ、そ、そうでした！ ごめんなさい、みおちゃんのところにありますっ」

「えー？ じゃあわたしはどこで着替えればいいの？ そうなるとおにいちゃんの部屋と一緒に着替え」

「はわわ！ や、やっぱりお兄さんの部屋で待ってますっ！ お兄さんが着替える時は目つぶってますっ！」

「いやそれおかしいから」

美央もどうしてそんなこと言うかな。母親の視線が俺の後頭部に突き刺さってくるの、見なくてもわかるんですが。

ひとまず美央は口を塞いで黙らせておき、鴨紅さんを美央の部屋に行くように促しておく。

鴨紅さんが再び上へ階段を上っていくのを確認した俺は、塞いでいた手を離し、それまで我慢していたむーむーと俺の手から抜けていく美央の息の音のくすぐったさからようやく解放された。

「く、苦しかったよ……もう、いじめることだけは朝からでも積極的なんだから」

「普段から何かやっているような言い方すんな」

本当はわざわざこんなツッコミはしたくないのだが、母親の見えない刃を意味なく受け続けたくはない。一応アピールはしておかないといけない。

結局、さらに数割増しされるのは変わらなかったが、それどころか「やっぱり、警察に……」とつぶやいているのが聞こえてくる。わざとだ。絶対わざと俺に聞こえるように言ってる。

「さ、いい加減朝飯食つか」

これ以上美央とどうこう言い合っていたら、台所から本物の刃が飛んで来かねない。気持ちを切り替えることにして、朝食の置かれているテーブルに向かう。

美央は不満そうな顔をしているが、これ以上身を削るような不毛な争いはしたくないのだ、妹よ。

……朝だからなのか、テンションがおかしい。母親からのプレッシャーがそうさせているとも言えるわけだけど。

テーブルに並べられているのは、自分で焼いたトーストと既に作り置かれたベーコンが添えられている目玉焼き。典型的な、洋食スタイルの朝食だ。

俺としてはご飯が食べたいところなのだが、炊くのが面倒だと言われなかなか実現しない。和食の力を舐めないで欲しいね、ご飯を食べれば集中力が持つんだぞ。学校の勉強にも影響するんだぞ。

……うん、全くその言葉に説得力がないから実現しないんだろうな。自分で納得してしまうのも空しいものがある。

「ところで、おにいちゃん」

目玉焼きをかじりながら、美央が話しかけてくる。

俺はトーストをかじりながら目を向けた。話を聞く体勢になる。

「るりちゃん、かわいいでしょ」

「何言い出すかと思えば」

「寝起き襲われて嬉しいくせにー」

「美央がセツトになってたらそれどころじゃない」

「ふーん……」

突然美央の目つきが怪しくなる。口の端が上がって、ともかくニヤニヤと気持ち悪い。

「なんだよ」

「明日から、るりちゃん一人におにいちゃんを起こしてもらおうようにしようか」

「は？」

条件反射で聞き返してしまった。

「覚悟しておいた方がいいよー？」

「どうということだよ」

「だってさ、わたしが今まで色々おにいちゃんにやってきたことって、るりちゃんのためだもん。おにいちゃんのこと気になるからって、わたしがポイントを探ってたんだよ？ るりちゃんだったら、わたし許せるもん」

美央が高校生になってからやたらと俺にくつついてきた理由がいきなり解明する。あまりにいきなりすぎてついていけない。それに許せるってなんだ。俺は美央の物じゃないぞ。口に出して言ったらあらぬ誤解を受けそうな感じがするが。

ただそれを今言ったということは、もう美央は俺につきまとってこないという意味にもとれる。あとは鴨紅さんにそんな行動をしないでくれと言えば安泰なんじゃないだろうか。美央に一応確認をとってみる。

「ということは美央はもうくつついてこないんだな？」

「違うよ？ べ、べつに、るりちゃんのためだけにやってたわけじゃないんだからね！ それにまだまだるりちゃんにいろいろ教えるきやいけないんだから！」

え、なんでここでシンデレレの台詞。

さらに、いわゆる今までのくつついてくる行動をやめないという  
宣言が、俺の頭を抱えさせた。

### 3 お嫁さんに来てくれれば

「いつてきまーす!」

「いつてきます」

朝食を済ませ、俺と美央は玄関を出る。

「あ、あの、朝からお邪魔してすみません。おばさま」

……今日は一人、プラスして。

そもそも、母親もなんで朝から他人を家に入れてるんだと今となつて思う。俺の部屋に入ってきてどうこう言う前に、まずそこを問い詰めたところだ。

でもきつとそんな俺の言い分など聞き入れもしないだろうし、無駄な争いは避けておく。俺も大人な対応ができるようになったものだ。当然、これは母親に対する皮肉だとはつきり言っておく。

「あら、るりちゃんはしっかりしてるわね、私の娘に欲しいくらいだわ」

朝だけで余計な体力を使用し、学校に行く前から意気消沈している俺としては、それは勘弁願いたい。

大人な対応を謳った矢先ではあるが、これには一言申し立てたいと、俺が口を挟もうとした時だった。

「えへへ、じゃあさ、るりちゃんがお兄ちゃんのお嫁さんに来てくれればいいんだよね?」

「あ、あわわ! お嫁さんだなんて、そのっ……」

「ああ、ごめんなさいね。さっきの発言却下」

母親自身から却下してもらえないのはありがたいが、素直に喜べないのは気のせいではないと思う。切り捨てたように言い切ったのが、余計に悲しい。

鴨紅さんもそんなに慌ててもらってしまつと、俺の方が恥ずかしくなる。ただの妹の友人なだけでしかないのに、いきなりお嫁さんは話が飛躍しすぎている。

でも養子に来てもらえば……でも一つ屋根の下に置いとけない、とか相変わらず俺に聞こえるような声で母親が言ってくるわけだが、どこまでも俺を信用していないというか、もはや家から出て行つてくれレベルの話に聞こえてくる。いくらなんでもその態度はないんじゃないか。泣きたくなってくる。

もう会社に着いていると思われる父さん、俺は強く生きてます。

「えへへ、おにいちゃん？」

「なんだよ」

「両端をがっちり女の子に固められてる気分はどう？」

「視線が痛い」

美央が俺の腕を取り、生意気にも片足を上げながらウインクしてくる仕草を取る。遊園地に行った時にあまり振り払うことをしなかったせいかな、今日は一段と増してきつくなっているように思う。

もう片方の手では、振り回すくらいの振り子運動で、加えてアクセサリーがたくさんついているために金属の擦れ合う音がうるさい、チェック柄の赤いカバンが持たれていた。

逆側では鴨紅さんが、地面に視線を向けながらも腕に彼女の肩がぶつかってくるくらいの近い距離を保って、並んで歩いている。

美央とは対照的に、指定の学生力バンを両手を前にして持っている彼女。ウサギのようなネコのような、ピンと来ないけれど彼女ら

しく可愛らしいマスコットを揺らしていた。

ただでさえ美央と一緒に学校に向かっていた時も目立つというのに、目立って注目されるあげく、もう一人連れているなんて光景を見たら、少なくとも優しい視線は飛んで来ない。俺だって事情を抜きにして同じような人を見たら、今の俺が受けている視線を送っているだろう。

いや、もしかしたら同じ理由でいる人かもしれないと、同情の目で見るかもしれないが。

「視線の痛さは最初だけだよ？　だんだん快感になってくるんだから」

「そんな悟りは開きたくないな」

「あ、あの、お兄さん……もしかして私、迷惑ですか？」

「あ、いや！　鴨紅さんは悪くないよ」

「るりちゃんは特別なんだ……わたしは迷惑なんだ……」

「美央はもうちょっと自重してくれないと困る」

「あうあう、わたしにだけそんな態度とるなんて差別だよ……それとも、これも愛情表現の一つ？　いつもそんな風にわたしをいじめてくるもんね……」

「思っのは勝手だが口にしないでくれ、飛んでくる視線が笑えないものになる」

二人を相手にするとこんなに疲れるものなのか。何を言ったらいいか把握している美央だけだったらまだ強く出られるが、鴨紅さんがいる手前、どっちつかずの対応になってしまう。

今後、俺はこの生活に耐えられるのだろうか。不安で仕方がなかった。

## Event・i 逆チヨコならぬ（前書き）

イベント事がある時は、視点が変わることしばしば。  
本編を外れて、ちよつと一息。

## Event・1 逆チョコならぬ

「あわわ、ついにこの日になっちゃいました……」

私は、鴨紅るり。これといった特徴もない、普通の高校一年生です。

そんな私だけど、気になる人がいます。

私をいつも気にかけてくれる、同級生のみおちゃん。そのお兄さんが、頭から離れないんです。

もともと男の人とお話することが少なく、たまたまみおちゃんを通してよく会うから、意識してしまうのかもしれない、そう思っていました。

みおちゃんにそれを話したら、お兄さんと会う機会が増えることになりました。

朝にいきなりお兄さんのお部屋に入って起こしたり、一緒に登校したり……まさか最初からそんなことをするとは思ってもいなかったけれど、でもそれが嫌なわけではなく、むしろ楽しいんです。

もっと、気になる存在になりました。

恋、なのかどうか、それはまだわかりませんが。

三月十四日を指すカレンダーを見ながら、深呼吸して気持ちを落ち着けさせて。日付が変わるわけでもないのに、そんなに見つめていても仕方ないとは思うんですけど……でも、そうせずにはいられませんでした。

二月十四日のバレンタインデーでも、もちろんお兄さんにチョコを渡しています。けど、あまりお菓子を作るのは得意ではなくて、納得はしていません。

だから一ヶ月後の今日はリベンジの日。バレンタインの日に男の人から女の人に逆にチョコを渡すようなことがあるのなら、ホワイ

トデーの今日、女の人から男の人に何かを渡すのだってありのよう  
な気がします。

リベンジと言っても、お菓子作りでは同じ結果になる気がします。  
だから、何かプレゼントをしようと思いました。

だけど、何かあげるとしてもおこづかいの都合もあります……  
とにかく迷った結果、私がいつもカバンにつけているお気に入り  
キーホルダーの、色違いのものをあげることにしました。

今日は休日なので、みおちゃんの家に向かいます。  
思いが通じたのでしょうか。途中で、お兄さんと会うことができ  
ました。

「あ、鴨紅さん。こっちは鴨紅さんの家とは反対だよ……美央に  
なんか用？」

「お兄さん……あわわ、そ、その。お散歩です」

でも、心の準備がまだでした。今日はお兄さんに用事があるだけ  
なのに、お散歩と答えてしまいました。このままだと、渡す前から  
今回も失敗になってしまいます。

「そっか、今日は暖かいから絶好の散歩日和かもな」

「そ、そうですね……」

もうお話は散歩のことになってしまいました。もう切り出せるチ  
ヤンスは無さそうな気がします。

私にも、もう少し踏み出せるような勇気が、みおちゃんくらいに  
あったら。でも、今考えても遅い気がします……

「と、ところでさ」

「はい、何ですか？」

「あ、いや……なんでも」

「え？ ……は、はい……」

すると突然、お兄さんのお話が止まってしまいました。私をあまり見てくれません。

そして、私は気づきました。みおちゃんがないのが初めてで、つまり二人だけでお話をしたのも初めてで……

「鴨紅さん、あのさ」

「あ、あわわ、その、ごめんなさい！ 私、二人だけになってしまっていることに気づかなくて、お兄さんに気を遣わせてしまって……すみません、私、帰りますね！ きゃ！」

とにかく慌ててしまっていた私は、小石につまづいたのに、すぐに気づけませんでした。

そのまま、お兄さんの胸に顔を押しつける形で飛び込んでしまいました。

少しの間はどういうことかわからなくて、そのままできてしまった、お兄さんの胸の中は包まれるように暖かくて、そして心臓の鼓動が少しずつ、私の鼓動と同期するように早くなっていくのがわかります。

私の胸もお兄さんに押しつけているから、同じことを思っているでしょうが……

すごく大胆なことをしてしまったのに気づいたのは、その後でした。

「鴨紅さん、大丈夫？」

「あ、あわわわわ！ ごめんなさいっ！」

なんだか、お兄さんと会う時はいつもこんな調子な気がします。そのたびに顔も見られなくなりそうなほど恥ずかしいですけど、今日は特に、二人だけしかないので顔を反らすわけにもいきません。つまづいた拍子に投げてしまったカバンを、お兄さんは拾ってくれて、私に差し出してきます。

「はい、カバン」

「あ、ありがとうございます……」

そうだ、お兄さんのカバンも私を受け止める時に投げ出されています。

私が拾って……そうだ、これはチャンスなのかもしれません。スカートのポケットに入れておいたキーホルダー、この際にお兄さんのカバンにつけて……

「あ、あの、お兄さんも……ごめんなさい」

「ありがとう」

そして、その時気づきました。

もともとカバンにつけていたキーホルダーに、さっきお兄さんのカバンにつけたはずのプレゼントのキーホルダーが増えていて、ペアになって二つ、踊っているのです。

私はマジックみたいなその出来事に驚くしかありませんでした。

「あ、あの、キーホルダーが……」

「あ、気づいたんだ。一応、ホワイトデーだからプレゼントをと思って、今渡しに行こうとして。ちょうど良かったからつけさせてもらったんだけど……さすが鴨紅さん、すぐ気づくとは思わなかった」

「あの、というか……」

「ん？ あ、あれ？」

私が視線をお兄さんのカバンに向けると、お兄さんが驚いた顔をします。

そうですね……今つけたはずのキーホルダーが、自分のカバンについているのですから。

「私からの、プレゼントです……いつもお世話になっているから、  
と思って……でも、まさか、あの……」

「むー、同じキーホルダーつけるなんてラブラブなカップルみたいなことして……るりちゃん、抜けがけ」

「みおちゃん！ あ、あわわ、カップルだなんて、そんなっ……！」

プレゼントがおそろいになってしまって、どうしようと考えていて周りを気にしていませんでした……私の後ろからみおちゃんの声がした時は、危うくまたつまづいてお兄さんに飛び込むところでした。

でも、飛び込めなくて残念だと思ってしまう私もいたりします。  
さっきの心地よく包まれる感覚、もつと感じていたいです……  
なんだか、はしたないことばかり考えてる気がします。

「カップルとか、鴨紅さんに失礼だろ」

「えー、今さらるりちゃんの視線に気づいていないフリ？ ちよつと押しを強くするだけでも、すぐに体をゆだねてくると思うよ？  
ほら、こんな感じとか！」

みおちゃんが私の後ろでピッタリ体を押しつけてきて、そして手だけが前に伸びてきて……

「きゃ！ み、みおちゃんやめて……っ！」

「おおー、また大きくなって……誰のためなのかなー？ ほれほれ」  
「やつ、や、やめ……ってよお……」

普段からみおちゃんはどういうことをしてくるけど……今日は、特に恥ずかしくて仕方ないです……

「美央、鴨紅さんが困ってるだろ。やめろって」  
「はい……」

お兄さんが止めてくれたけど、でも、私がこうして攻められているのを見ても、何も思ってくれなかったのは悲しいかも、と考えてしまいました……なんだか私、変かもしれないです。

そんな恥ずかしさで顔を上げられずにいると、いつの間にか隣にお兄さんがいました。

その距離は自分の考えていることが伝わってしまいそうで、とにかく話をプレゼントのことに戻して……

「あ、あの、ごめんなさい。プレゼント、せっかくもらえたのに、同じもの渡してしまつて……」

「いや、俺こそごめん。あ、えつとさ……ちゃんとつけとくから。鴨紅さんはそれ、どうしてもかまわないから」

「い、いえっ！ちゃんと私もつけておきますっ！」

お兄さんからの贈り物。それを大切にできないわけないです。

おそろいになってしまいますけど……たぶん、お兄さんも恥ずかしいはずなのに、つけておいてくれるなんて優しいこと言ってくれたのに。私だけそんなことできません……

今、お兄さんが優しいのはみおちゃんの友達だからだろうけれど

……

いつか、私のカバンにかかっているキーホルダーのように、くっついていられる関係になりたい。  
そんなことを、思っていました。

#### 4・逆ドリカム状態

そもそも突き刺さる視線は一向に変わらなくて、この生活に耐えられるかをどうこう言う以前に、今のこの状況を耐えられるかさえ怪しいようだ。

注目を浴びる要素は、まだ終わらない。

「あ、あわわわわ」

横断歩道を渡りきって歩道の段差を上がろうとした鴨紅さんが、つまづいて頭から突っ込む勢いで倒れていくのを見てしまったら、さすがに見過ごすことはできないわけで。

俺は両手を伸ばして抱きとめようとしたが、左手が美央の腕で埋まっていることを忘れていた。開いている右手を、とりあえず鴨紅さんの倒れる前に持つていく。

それが、ある意味で失敗だった。

右手だけで体重を支えられるくらい鴨紅さんが軽かったおかげで、とりあえず地面への激突をまぬがれはした。

女の子ってこんなに軽かったのか。美央もそれくらいだったかな……あまりにも振り回されすぎててそこまで考えたことがない。とにかく鴨紅さんのもたらす重みは、ふんばる必要などまるでなく、それでいて確かな存在がそこにはあつて、なんだか心地よささえ感じる。

と、そんなことを悠長に考えてごまかすようなことはできないことが起こったのだ。

出した腕はちょうど鴨紅さんの胸の前で、そこに鴨紅さんの全体重が乗っかってきたおかげで、朝に顔に受けていたそれとは比べものにならないほど……といっても、朝は実際に見たわけではないが、しっかりと腕を飲み込むように食い込んできているのだった。

まだ高校一年生のはずなのに腕を飲み込むほどとは、見た目スレンダーな外見だけにギャップを感じて、いいというか悪いというか、とにかく何がと言わないが大きいということだけはわかる。というか、俺は何を考えているんだ。これじゃただの変態じゃないか。

「ご、ごめん！」

「あ、いえ、こちらこそ、ごめんなさい……」

少し考えてしまつてそのままにしてしまつたのを反省しつつ、俺はその柔らかみから右腕を離れた。

どうしてだ。俺は何も悪くないのに、鴨紅さんにセクハラみたいなことばかり繰り返しているような雰囲気になつている。というか、端から見たら完全にそうなのだろう、一段と視線が怖くなつていくのを感じた。しかもこれに至つては男だけでなく女側からの視線も加わつてしまい、もう収拾のつけようもない。

「むー、おにいちゃん、わざとやつたんじゃないの？」

「どこをどう見たらそうなるんだよ、つまづいたのを助けたんだぞ」「でも朝のこと思い出してちよつと嬉しかったり？」

「しない。変な誘導しようとするな」

「あわわ、あの、気にしてないですからもういいです……」

「あれれー？ るりちゃん、気にしてないってことはもしかしてむしろ触つてほしかったり？」

「そ、そういう意味じゃないよお……みおちゃん、からかわないでっ」

俺が否定すれば矛先は鴨紅さんに向けられて、しかも同じような聞き方をしてくるのだから、美央もいやらしいものだと思う。

「もうやめてあげてくれ、鴨紅さんがかわいそうだ」

「あう……目の前でイチヤイチヤしてるのを見なきゃいけないわたしは、かわいそうじゃないんだ。やっぱり、るりちゃんの肩だけ持って、わたしは捨てられちゃうんだ。新しい人見つけたら、もうわたしなんか用済みなんだ……」

人聞きの悪さも程がある。美央が俺から腕を離し、下を向いてため息をつくという普段ではありえない行動をとっているのが、余計に俺のアウェイさを引き出していく。そのまま俺を見る美央の目が、笑っているように見えるのが腹立たしい。

しかし周辺の人にそんな美央のドス黒い魂胆を見るすべはなく、さらにこうまで注目されると、これ以上視線が増えるわけでもなく、その視線が怖くなるわけでもなく、ただ、またかと言わんばかりに無視の状態へとレベルアップするのだ。

それは逆に恐ろしいこともある。俺が普段からこんなだと認められてしまったようなものだ。否定したいところだが、否定なんかしたらますます立場が悪くなっていくのは目に見えている。手の打ちようがないというのはこういうことなんだと、よく理解できた。できれば理解なんかしたくなかったが。

「はあ……逆ドリカム状態ってこんなにもつらいんだな」

美央の攻撃があまりにも心をえぐっていくようなことばかりすぎて、だからこの際、女二人と男一人の状況を一応受け入れ、誰にも聞こえない程度でもいいやと、俺は息を大きく吐きながら力を入れずに言う。

「お、おにいちちゃん古い……そもそも今のドリカムは二人だよ？」  
「その歴史を知ってる美央もどうかと思う」

なんだろう。突っ込みどころはそこなのかとか以前に、お互いにメリツトのない会話な気がする。美央を怒る気も起きなかった。三人全てが得をしない、そんな朝。これからの生活どころか、今日一日の始まりからして頭が痛くなった。

## 5・シスターアタック

一日が過ぎるのは早い。

気づけば今日の授業は全て終わり、放課後になっていた。

夢と現実をさまよい続けた俺が一日の過ぎゆく早さを説いていいのか、という疑問には目をつぶっておく。

そんなことをしているからというわけでもないが、今日は放課後にやらなければいけないことがあった。

それは、まもなく行われる文化祭の委員打ち合わせだ。

朝のホームルームで意識が飛んでいる間に勝手に委員に決められてしまい、それで行くことになってしまっている。

……と言ってみたものの、周りの証言によると、俺はちゃんと引き受けるニュアンスの返事をしていたらしい。無意識に周りに合わせる……もしかしたら授業の時もそれで乗り切っていたのかもしれない。それにしたって、そんな時に急に発動してくれなかったいいじゃないか。

まあ、そんなことをしているから委員に選ばれてしまったということでは、自業自得なのかもしれない。

「えへへ、おにいちちゃんと一緒に委員になるなんて、運命的なものを感じるよね？　ときどき」

委員に決まって美央と離れることができるならそれもまたよし、と思って自分を納得させていたのに、美央まで一緒になるとは思いません。

どこに着席してもいいというこの委員会、始まる前から美央がもう横に座っていた。

「頼むからあんまり目立つようなことしないでくれよ」

「えー？ 委員になったのって、いろいろしたいからなのに」

美央が提案するようなイベント……何が出てくるのか怖くて考えたくもない。

委員会が始まり、さっそくその不安は的中することになってしまっただけだ。

「では、何か提案などありますか」

「はいっ！ カップルコンテストはいつものことなので、それに加えてシスターアタックコンテストとかどうですか？ どのくらいラブラブか」

「すいません、今のは聞かなかったことにしてください」

今ほど、美央の隣にいてよかったと思うこともない。

俺は美央にもう何度目かわからない口ふさを強制発動させて、最後まで言わせずシャットアウトさせる。

「はは、もしそれをやったら高坂さんの圧勝でしょうね」

「いや、委員長も納得しないでもいいですから」

納得がどうこうよりも、俺と美央の関係が普通に知れ渡っているから困る。まだ笑ってくれているだけマシだ、と思っておくしかないのか……なんだか、美央を止めている俺の努力が無駄だと言われているようでむなしい。

「えへへ、それもそっかー」

そして何度も同じことをされている経験からか、美央がすでに俺の手からすり抜けてしゃべり出す始末。しかもなんでそこで肯定す

るかな。道連れにされた俺に、周りの委員の見守っているように見せかけておいて、冷たく刺してくる視線が、なんともいたたまれない。

結局、朝と変わらない状況に泣きなくなった。

## Event・2 だいきらい

学校は今、春休みに入っている。肌寒さも抜けはじめ、心地のよい平和な日々を送るはずだったある朝の七時のこと。

寝起きから食らった突然のとある宣言に、脳にまで汗をかきそうなほどの動揺をしなければならぬ出来事が起こることになることは、予想だにするわけもなく。

「お、お兄さんなんてだいきらい、です……っ」

俺の部屋の中、いつの間にか当たり前のように入出入りするようになった鴨紅さんが、俺に宣言してきたのだった。

宣言してきたのだった、と簡単に言っただけはみたものの、あまりにもいきなりすぎてわけがわからない。そもそも俺、嫌われるようなことをしただろうか。

覚えがないからにはうまく返事することもできず、ただ驚くばかりなりアクションしかできなかった。

「えっ、鴨紅さん……ん？」

「私よりも、みおちゃんばかりで……私なんて、かないません。だから、私……」

鴨紅さんが俺から視線を外し、首をたらすようにうつむいたままに、声は確かに俺に向けて言った。

「彼が、その、できたんです……」

「えっ」

鴨紅さんの言葉に、吐いた息から声が漏れた。

いつの間に。美央からもそんな話は聞いたことがなかったし、ここ最近近くにいることが多いのにまったく気づかなかった。

「いつも、優しくしてくれて。嬉しかったけど、でも、もう諦めるしかないと思いました。そう思うと、お兄さんのこと、もうだいきらいだって……」

彼ができたのなら、余計な男と付き合うのは確かにやめておいたほうがいいのかもしれないとは思っけれど。

とはいえ、心の準備もさせてくれないまま面と向かって嫌いと言われるのは、かなり衝撃というか、実際物理的に頭を殴りつけられているような感覚に陥る。

「そ、そっか……わかった。もうできる限り顔を合わせないようにするから」

「えっ？ えっと、あの……その……」

鴨紅さんの意向を汲まないわけにもいかないのです、俺はなるべく関わらないようにする旨を伝えたはずなのに、なぜか鴨紅さんの顔は冴えてないように見える。

いたたまれず、俺は視線を動かす。たまたま部屋のドアに視点があつた。

いや、もつと細かく言えば、半開きになっっているその向こうにある視線と、だが。

……なるほど。今日、カレンダーを四月にしたばかりなのをすっかり忘れていた。こんなイベントを逃すわけない人物に、俺は心当たりがある。

俺の視線に気づいたのだらう、ドアが開いて美央が入ってきた。心当たりの人物そのものだったので、そこに驚くことはなかった。

「えへへ、ちよつと驚いたでしょー」

「鴨紅さん巻き込んでなにやってるんだ美央は」

「だーってー、わたしが何かしたって、おにちゃん全然反応してくれないんだもん。るりちゃんだったら、きつと新鮮なりアクシヨンしてくれるかなーって」

確かに、動揺してしまったのは事実かもしれない。

鴨紅さんを共犯にしてまでエイプリルフルという日にかける美央には、ある意味頭が下がるものの、やられっぱなしというのも嫌なもので。

「まあ、確かにショックだったかもな。鴨紅さんのこと好きだって気持ちる封印しようとは思ったよ」

「え……っ、は、はわわわ」

「ええーっ！ おにちゃん、それホント!？」

「お返した」

まるでタイミングを打ち合わせていたかのように、二人の反応がぴたつと止まる。

「おにいちゃん……」

「な、なんだ」

美央の目の鋭さに、後ずさりしそうになるほどにはひるんだ。

「乙女心を踏みにじるなんて、さいてーだよ。どうなっても知らないよ?」

「お、お兄さんなんてだいきらい、です……っ」

鴨紅さんのセリフが数分前にループする。

ただ違うのは、今度ばかりは冗談でもなんでもないような……  
美央の宣言通り、俺はお返しをしたつもりだったのに、大きな代  
償を負ってしまったようだった。

## 6・ちらちら

委員が終わった後も美央から解放されることは相変わらず許されないことらしい。

委員長の「終わります」の声とともに、俺はさつさと出口に向かおうとしたのだが、美央もその行動を読んでいたみたいだった。

「かわいい妹をほつといて、どこに行くつもりなのかな？　かな？　用事なんてないのわかってるんだから、一緒に帰るよね？　断るなんてことしないよね？」

確かに用事はないとはいえ、最近の美央の誘い方は脅迫に近いから困る。

そもそも断る以前に、既に腕をつかまれていた。こういう時の美央はとにかく力が強い。さっきの美央が委員会で放った発言および委員長がした反応のせいで、あたりの視線のなんと冷たいことか。いい加減、俺に同調してくれる人がいないものだろうか。なんてとても望めないようなことを考えてみる。むなしさだけしか残らないから嫌になった。

美央はその視線を気にもしていないのか、返事も聞かないまま、俺の手を引いて歩き出した。

「で、帰るんだよね？」

「うん、そうだよ？」

「じゃあなんで上り階段を使っているのかぜひ聞きたいところなんだが」

「さあ、どうしてかなー？」

ずいぶん意味ありげに美央が言うものだから、考え込んでしまっ

た。何か行くような場所があっただろうか。

結局、まったく答えが出ないまま、校舎の最上階へやってきてしまった。しかし、美央はさらに続く上り階段に引き続き足をかけている。

「答えはお楽しみの屋上だよ？ えへへ、何が起こるかなー？ どきどき」

学校の屋上は立入禁止ではないが、放課後から委員会をする時間を経たこんな時間までわざわざ屋上にいる人などごくわずかだ。特に夕焼けが言うほどきれいとかいうわけでもなく、これといった特徴のない場所。美央がなぜそんな場所に引っ張り出そうとしているのか。想像がつかなかった。

「とうちゃーく！ ドア開けるね？」

考えている間に屋上のドア前まで来てしまっていた。今思えば、こうして考え込ませられたことで抵抗なくここまで連れてこさせられたのかも知れない。

相変わらずの美央の策士っぷりに、もうなすすべがなかった。

「もう好きにしてくれ」

ここで引き返そうとしたって無駄なのだろう。美央もどうせ有無を言わず実行するだろうし、意味なく時間のロスをする必要もない。

俺が適当に返事をする、案の定聞いているのかいないのか、既にドアを開いていた。

暗い階段から解き放たれた光に目がくらむ。強い風で目が痛くな

ったのも手伝って、少しばかりの間、目を閉じてやり過ごし、再び目を開けた時だった。

遠くの方でフェンスに寄りかかっている、鴨紅さんの姿が目に入った。

それだけだったら、まだよかったんだろうけど。

ちょうど俺がくらった、目が痛くなるほど吹き荒れる強い風が困ったことを引き起こしてくれた。鴨紅さんのスカートを捕らえて、さもさらっていかのようになり上げていったのだった。

……不可抗力だとはつきり言っておくが、違った意味で光のように白く、目がくらみそうなものがちらちらしているのを見てしまった。

鴨紅さんもさすがに気づいたようで、慌てるように両手でスカートを押さえ、うつむいている。

周りを気にするよりも恥ずかしさが勝ったのか、下を見たまま動かないでいた。

さあ、どうするか。すぐ下を向いたということは、つまり鴨紅さんは、俺たちがいることに気づいていないわけだ。

……うん、俺は何も見えていない。今来ただけ。それで行こう。

そもそも気づいていないなら余計なことを言う必要自体がないのに、変に言い訳しつつ、鴨紅さんに声をかけようと一歩踏み出そうとした。

しかしそうやってごまかしてみたところで、真横から来る視線を無視し続けることもできず。

美央の方を向くと、口を大きく横に広げたような、それはもう、悪いことを考えてますよ的な笑顔を繰り出していた。

それは、嫌な予感どころの話ではなかった。

## 7・にやにや

「るりちゃん！ お待たせー！」

俺がなかったことにしようとしていた出来事をあっさりひっくり返すかのように、美央は鴨紅さんの方に向かってすかさず手をメガホンのような形にして叫んでいた。

お待たせ、と言っているということは、鴨紅さんここで待ち合わせをしていたらしい。どうやら屋上に来たのはただそれだけの理由だったようだ。

やっぱり含んだような言い方はフェイクだったのか。

「あ、み、みおちゃ……んっ」

かすかにしか聞こえなかったその声。スカートを押さえる手もそのままだに、鴨紅さんが美央を、そして俺の方を見る。

鴨紅さんが俺たちの存在に気がついたのをきっかけに、美央が手を引っ張るのをまでも抵抗できないまま、俺は鴨紅さんのところまで連れて行かされた。

「もしかして、見て……っ、たんですか？」

何を、とは鴨紅さんも言わないが、当然それは一つしか考えられない。確認のためにここで聞き返すなんてことをしたらデリカシーの無さ過ぎもいいところなので、言わないでおく。

「るりちゃん？ それは何を、なのかなー？」

「うっ、みおちゃんのいじわる……」

しかし例外というのは、意外と身近なところに潜んでいるものらしい。ある意味、期待を裏切らないと言っている。

コメントのしようもなく俺が黙っていると、鴨紅さんはそれを肯定の意味ととらえたようだった。間違っていないわけだが。

「や、やっぱり見てた…… なんですよね？」

「うんっ、もうばっちりー」

「はわわ……わたし、なんてはしたないところを……ごめんなさいっ」

鴨紅さんが視線を俺に向けて謝ってくる。やっぱりその言葉は俺宛てのものか。

だいたい、見てしまったのは俺なわけだから、何も鴨紅さんが謝ることではない気がする。というか、むしろ？

「るりちゃんが謝ることなんてないよー、だっておにいちゃん、るりちゃんを見てにやにやしてたし？」

「デタラメ言っな」

ようやく鴨紅さんの前で出した言葉がこれというのもどうなんだろう。

俺の脳内で済ませるべきことが、ことごとく美央の口から流れていくのもどうなんだろう。

あ、別に、にやにやしているわけでは……ないと思うが。

「恥ずかしいです……」

しかし縮こまっていく鴨紅さんを見ると、申し訳ない気持ち膨らんでいく。

「ごめん」

とりあえず一言、謝っておいた。

これで解決してしまえば、とても平和で安泰なものだろうが。美央のことだから、これで終わりなんてことはありえないんだろうなとは思った。

「おにいちゃんも謝らなくなっただけいいのにー。どうせそのうち、ちゃんと見せるときが来るんだから。ねー、るりちゃん？」

「え？ え？ はわわ、そ、そんなこと……っ！」

俺の予想は当たっていたが、美央の発言の内容は想像以上だった。しかしこの言葉は鴨紅さんに向けてなのか、それとも俺なのか。

もはや変に発言するとカウンターされそうなのが怖くて、下手に美央に口出しできなくなってしまうていた。

## 8・ひらひら

「だからね、るりちゃんはまだ切り札を出しちゃいけないんだよ。ギリギリまでに止めといて、ドキドキさせなきゃ」

しかし、口出ししようがしまいが、美央の話はまだまだ終わってくれないらしい。

というか、なんだこの会話は。まさか美央と鴨紅さんは、普段このようなことばかり話しているんだろうか。

「おにいちゃんはミニスカートが好きなんだもんね？」

「いつ誰がそんなこと言った」

俺はすかさず美央にツツコミを入れていた。

この勢いに飲まれようが、下手に口出しできなかるうが、否定すべきところは否定しなければ。

「前に遊園地で膝枕した時にスカートじゃなくて残念そうにしてたくせにー」

「だから勝手に俺の気持ちを断言するなよ……」

そもそも膝枕だつて、俺が芝生に身を預けようとした時に美央が膝を差し込んできたのだ。スカートじゃないのが残念とか言ってないし、思ってもいない。美央が変な想像を膨らませて「今度はスカートにする」とか言っていたような気はするが。

「とにかく、見えそうで見えないってすごく効果的なんだよ？ ほらほらるりちゃん、聞いてるだけじゃだめだよ、やってやって」「え、ええっ!？」

口の中には何もなければずなのだが、俺は何かを吹き出しそうになった。

「そ、そんな……みおちゃん……」

鴨紅さんはあまりにも変な展開に戸惑っているのか、普段の鴨紅さんの行動には見られない泣きそうな声と、美央に甘えるような口調で助けを求めている。

その間に美央は鴨紅さんの横に並んでいた。助けるのかと思いきや、さらに突き放している。

「甘えたってだめだめ！ せっかく屋上なんだし、スカートひらひらさせるにはいいシチュエーションでしょ？」

「そ、それで屋上で待ち合わせにした、の……？」

まさか鴨紅さんまでもが、美央の策に陥れた被害者の一人になってしまうとは。

声どころか、もう顔まで泣き出しそうになっていて、一層かわいそうなオーラが増している。今までの俺の経験から言っても、同情せざるを得なかった。

そこまで思っているのに何もしない俺もよっぽどひどいのかも知れないが。しかし助けようとしても、巻き添えになって共倒れになるのがオチだろう。

「だってこうでもしないと、るりちゃん何もしなさそ……きゃ！」「ひゃ！？」

そうこう言い合っている間のことだった。帰ってきたかのようなさっきと同じ強さくらいの風が、俺たちのいる場所を通り抜けてい

く。

それはもう、あまりにも都合よく目の前の二人の足の間を上るかのよう。

見ちゃいけない、と身体が反応するまでには時間が足りず……その結果、今度は至近距離で見るとはめになってしまった。

しかし、あれだけギリギリがどうこう言っていたのに、美央は押さえてすらいらない。あまりにも堂々としすぎていて、もはや逆に何が起こったのかわからなかった。

「ま、また……お兄さん、ごめんなさいっ！　もう、みおちゃん、帰ろうよお……」

「むー、じゃあまた今度ね？　で、おにいちゃん？」  
「なんだ」

きつと、この流れで聞かれることは、もうまともなことではないのだろう。

聞くのも無駄な気がして、わざと素っ気なく振る舞ってみる。

もちろん、その予想を美央が裏切ってくれることもなく。

「わたしのも見て、嬉しかったり？」  
「しない」

だから、誘導するような聞き方をしないでほしい。

## 9・もやもや

「覚えてもいないなんて、ひどいなあ、おにいちゃん」

「普通はそこ、忘れてくれと言ったところだと思っただが」

「もう一度見せてあげても、いいよ？　ときどき」

「遠慮しておく」

家へ向かう帰り道。それでもまだスカートが風にあおられた話が  
続いているなんて、普通の人であればありえないと思うだろう。

安心してほしい、俺もそう思う。

だけど、美央はやはりどこか違って見えるらしい。見てどうだった  
としつこく聞いて来るものだから、正直に覚えていないと答えたら  
この展開だ。もうこの会話がなされている時点で普通じゃない。

鴨紅さんは二度も俺に見られるなんてさぞかしショックなのだろ  
う、俺が話を振っても「はい」とか、一言のみの返事くらいなもの  
で、まともに話をしてくれない。

「でもでも、こんなにひらひらしているの見て、もやもやつと来る  
ものがあるでしょー？　おにいちゃん？」

ため息しか出なかった。バカバカしくて答えられない。

しかしそれも建前かもしれない。俺も男なので、何も感じなかつ  
たと言ったら嘘になってしまう。ここは答えるべきではない、それ  
が本音とも言える。

俺が黙ったままなのを美央は、やはりさっきの鴨紅さんの認識と  
同じく、肯定と見たようだった。

「るりちゃんのなんか、二回も見ちゃったんだもんね？」

「み、みおちゃん……もうやめてよお……」

さすがに黙ったままでいらなくなったのか、鴨紅さんがようやくまともに返事をした。

鴨紅さんが気の毒すぎる。本当に美央と大親友と言っているのか、ますます疑いを持ちたくなってきた。

「あ、あの、お兄さん……」

「ん、何？ 鴨紅さん」

「私、普段からこんな、はしたくない……ですからっ」

本来なら見てしまった自分の方が罪悪感を持つところなはずなのに、どうやら鴨紅さんは自分自身を責めてしまっているらしい。不謹慎だとは思うが、そう考えると、その赤みがかった頬に可愛らしさを感じてきてしまう。

とはいえ変に妄想が膨らむなどという、これ以上失礼なことが起こってしまわないように、よこしまな考えはぐっと押さえつけて、俺は鴨紅さんを見ないままに答えることにした。

「それはわかってるよ」

「私のこと、軽蔑しませんか……？」

「するわけないよ。というか、ごめん。美央がろくでもないことばかり。ちゃんと注意しておく」

「あ、い、いいんです。その……お兄さんなら、見られても嫌じゃないです……」

「むー、らぶらぶ……」

話に割り込んできた美央に、鴨紅さんが下を向いたまま、また黙り込んでしまった。

「よかったね、おにいちゃん？ また見せてくれるって」

「どうやったらその解釈になる」

そもそも、いい加減にこの話題から離れてほしい。

## 10. いらいら

「ねえねえ、遠慮しなくても見せてあげるよ?」

「この露出狂が」

鴨紅さんと別れ、これで話はひと段落したとほっとしていたのだが、まさか家に帰ってまでも話が続くとは思わなかった。

美央は俺の部屋に当たり前のように居座って、しつこく話を繰り返してくる。

これほど母親が買い物に出かけていてよかったと思うこともない。今まではあらぬ疑いをかけられてもかわすことができる感じだったが、こんな話のやりとりを聞かれたら、何やっていてもおかしくないと見られてしまう。

といつても、今までだって似たようなものかもしれないが。

「露出狂だなんて、ひどいよー。覚えていないんだったら、焼き付かせる。それがわたしのモットーなだけだよ?」

「そんなモットー、聞いたことがないしよろしくなさすぎる。というか今作っただろ」

どちらにしたって見せたことが良いことなのか。まったくそうは思わないが。

美央は制服のまま着替えようとしてもしていない。どれだけ時間が経っているかというと、同時に家に帰ってきて、一休みした後、俺は風呂に入って、部屋着に着替えた。この一連の動作をした小一時間といったところだ。

やはり、そんなに待機までしてやることではないのは明らかだ。時間で計る前の問題だというのは、最初から思っている通りなわけだが。

「おにいちゃんもかたくなだねー、素直になればいいのに」

「俺の対応は間違ってるのか……？」

「健全な男の子だったら間違ってると思うけどなー」

「目の前にして言ったらそれは健全じゃないと思うが」

「えー、そうかな？ でもわたしは、おにいちゃんになら言われても全然OKだよ？」

こんなことを正論で話すことなど、なかなかない機会だろうが、だからといって気が進んでいるわけではない。そろそろ疲れてきた。

「わかった、わかったからさっさと終わらせてくれ」

結局、さっさと要求を飲んで事を終わらせるというのがここ最近の俺の行動パターンとして定着してきてしまったらしい。あまり喜ばしいことでないとわかつてはいるが。

流されやすいのかな、俺。

「見たいって言うてくれなきゃだ」

「断る」

しかしさすがにそこは即答しておいた。理由なんて言うまでもない。

「わかったよ……そんなに見たいなら見せてあげる。ほらっ」

もはや人の話を聞いていない美央が、自らたくしあげはじめ。仕方なく視界に入れて、そして目に映ったのは、部活中に時々みかけるような姿だった。

「残念、アンダースコートでしたー」

「それがやりたかっただけか」

神経を使い果たして、力が抜けてがつくりときた。

「あうあう、いらいらしちゃだめだよ……期待してくれたのは嬉しいけど、また今度ね？」

もはや面倒で、反応を返すことさえ放棄したのだった。

「雄斗、また……」

しかし面倒なことは、一気に押し寄せるものらしい。

せつかくこの話題をスルーしようとしていたのに、このタイミングで母親が俺の部屋に入ってくるのは、もう運が悪いとは思えなかった。

## 11・愛のムチ？

なんだかんだいって、母親というものは息子を見捨てたりする事なんてないのだと思う。

良すぎるタイミングで俺の部屋に乱入してきた母親も母親だし、そもそも誤解だつてことをあらかじめ言っておくが、俺に向かつてスカートをたくしあげている姿なんて突然目に入れたらどう思うだろうか。

どう考えても、まずいだろう。

俺のせいではないと重ねて弁明しておきたいところではあるが、それでも何を言われるかわかったものではない。

結果から言うと、背筋が凍るような、とにかく見下す形で目を細めた冷たい視線をたつぷり浴びせられた後、居間から廊下にペツと吐き出されるように投げ出されるくらいで済んだ。

……それこそひどく見捨てられてる感が拭えないのは、この際、気のせいとしておきたい。

「それで、だ」

当然説教だけで終わるとは俺自身も思っではいなかったとはいえ。

「なんで俺は美央とまた出かけなきゃいけないことになってるんだ……」

「えっと、お母さんに怒られた、から？ えへへ」

「笑ってごまかすな。元はといえば美央が」

「じゃあ、れつつごー」

「ごまかそうとしている感が見えすぎてしまうから困る。しかし文

句を言おうにも、何をしたところで無駄な未来が容易に想像できて仕方がない。ここは変に労力を使わないことにしておいた。

こここのところ、根本は美央が仕掛けてきたことだというのに、なぜか俺だけが母親に怒られ、最終的にその詫びとして美央と出かける、というコンボが成立しすぎだと思うが、これは果たして偶然なのだろうか。

母親も、俺と美央を引き離したいのかどうなのかが今一つ見えてこない。

……当然のことだが、決してそこは「くつつきたいのか」などという言葉にはならない。俺の方こそ、そうしてたまるか。

「かわいい妹と出かけるのが、そんなに不満？」

「自分でかわいいとか言ってる妹と出かけなきゃいけないのは不満ではあるな」

「あうあう、おにいちゃんがいじめる……」

「愛のムチとでも思っておいてくれ」

「そっかー、いじめられればいじめられるほどおにいちゃんの愛が注がれてるって思えばよかったんだ……今度からそう思うようになるね？」

美央はそう言って、俺の腕を取る。

しまった、適当にあしらおうとして余計なことを口走っただらしい。案の定というか、美央が歯を見せるように口を大きく横に広げた形で悪い笑みを浮かべている。これは調子に乗りだした時のアクシヨンだ。

「最後は手足を縛って『もう許して、おにいちゃん……』とか言われるのを期待……」

「してないからそれ以上想像するのをやめてくれ」

何というか、美央の妄想がとどまるところを知らなさすぎる。よくもまあ、そこまでのことを恥ずかしげもなく言えると思う。

途中まで黙って聞いていられる俺も俺なんだろうが。

「実行したっていいのに……さつてと、とうちゃーく」

ツッコまないといけないようなことを言われた気がするが、その前に美央が続けて目的地に着いたことを宣言してきたおかげで、言葉を飲み込まざるを得なくなる。

この状況だと、ここであえてツッコんだところで美央が聞くわけもないのだろう。おとなしく諦めることにしておいた。

……どうやら流されやすいどころか、美央にどんどん甘くなってきたしまっているらしい。

「さーて、ここはどこかなー？」

自宅から徒歩で数分。着いた場所は、とある家の前だった。

ここがどういう場所なのか。答えは容易に想像がついたけれど、まさかとは思うが今からここに入るつもり、なんだろうが。

再び美央が「れつつごー」と言っているのを聞いてしまった時点で、俺はどうやら覚悟を決めて中に入らなければいけない状況にあるようだった。

## 12・部屋にご招待

「よ、ようこそです、お兄さん」

「い、いや、こちらこそおじゃまします……」

向かい合う鴨紅さんと俺に、

「むー、なんかお見合いみたい」

俺の横で、動じることなく余計な口を挟んでくる美央。

「こんなことになった原因は誰だ」

「あうあう……お兄ちゃんがぜびぜび、るりちゃんの部屋に行きたいとか言うから、わたしを通して紹介してあげたのに、裏切ったあ……」

「……よくぞまあ、そんな出まかせが堂々と言えるな」

意味なく目の前にいる鴨紅さんをいたずらに動揺させるのもどうかと思う。

さらに余計なことを言い出した美央を止めるのと、鴨紅さんに誤解だと説明するのとで、来て早々、頭がパニックに陥りそうになる事態が起こってしまった。

そう、美央に連れてこられたのは鴨紅さんの家で。そして今は、鴨紅さんの部屋にいる。

まさかこんな形で女の子の部屋に入るような機会があるとは思ってしなかったもので、それはもう、緊張する以外の何があるんだと問いたい。

これをもし口にしたら、美央が「わたしは女の子じゃないんだ……」

…あうあう」とかいじけてしまいそうだが、妹とはさすがに話が違いすぎるう。

……脳内とは言え、一瞬でも美央の口調を真似してしまった自分が気持ち悪い。

「むー……今、わたしの部屋と比べて、るりちゃんの方がよっぽど女の子らしいって思ったでしょ……」

考えていたことに当たらずとも遠からずという美央の言葉に、強く否定もできない。

どうやらどちらにしても、結局美央がいじけるのは一緒になってしまったようだ。

やむを得ない結果に俺は美央から視線をそらし、だからといってこの部屋主である鴨紅さんを直視することもできず……結果的に部屋を見回す形になった。

全体的に淡い青を基調としていて、シンプルながら、至る所に小物や勉強道具などが置いてあって、それもまるでそこが定位置であるかのようにきっちり片づいている。

ベッドの上には、想像通りというか、鴨紅さんらしく何かのキャラクターらしいぬいぐるみが枕の周りを囲むように置かれていた。

俺の部屋の様子とは……比べるまでもない。そもそも勉強道具が部屋に置かれているところからして、ありえないことなのだ。俺だったら部屋にいる時まで、そんなの見たくないね。

……さっきの親に散々浴びせられた冷たい視線が、美央から発せられたような気がした。

「それはともかく。いったい俺はどうすればいいんだ」

美央の視線から逃れようとしつつ、誤魔化せばなおありがたい

なと思いながら、俺は美央と鴨紅さん、両方に問いかけるように聞いた。今の時点では、どちらに聞いていいものかどうかもありやしない。

……意味なく呼ばれただけのような気もしないわけでもないが。しかし、その心配は無用だったらしく、ちゃんと目的はあったらしい。「誤魔化そうとしてるよね？」といぶかしげな視線を送ってくるのを俺はしっかり感じながら、美央のその言葉を聞いた。

「えへへ、今からおにいちちゃんに写真を撮ってほしいんだー」

### 13・ときどき撮影会1／準備中

「じゃあ、おにいちやんがカメラ持ってね？　で、もちろん、るりちゃんがモデル。はい、これがカメラだよ？」

俺の返事を待たずに美央がどんどん話を進めていく。

手渡されたカメラは、一瞬体が沈む感覚を受けるほど重い……おそらく一眼レフと言われるものじゃないだろうか。

俺もデジタルカメラ程度は持っているが、さすがにもっとコンパクトで、こんなに本格的なものではない。

だって、だ。なにこのシャッターボタンだと思って押したら、何かを撃ちそうな気のするレンズ。

そして本体上部から角のように生えている、目をくらすためにあるんじゃないかと思ってしまうくらいのが出そうな装置とか。テレビでよく見る、いかにもプロカメラマンが使っているような重装備のラインアップだった。

「こ、これで撮れ、と……？」

その重さに筋肉が負けて手ぶれを起こしてしまいそうだ。いや、そもそも手ぶれ以前に構えられるかどうか。いつものデジカメに慣れきっている自分としては、未知の世界だった。

「うん、そうだよ？」

美央も、俺のこの絶望感をあつさりと無視して言うてくれる。

「そもそもこのカメラはなんなんだ。ずいぶん高そうに見えるんだが……」

とても高校生の持ち物とは思えない。

「あ、これはるりちゃんのお父さんのなんだよ？ カメラが趣味なんだって。ね、るりちゃん？」

「あ、そ、そうなんです……その、私を撮るため、らしくて。実は、向けられると、ちょっと怖いんですけど……」

それはそうだろう。俺だってこんなのを向けられたら怖い。間違いないく撃たれる。いや本当に撃たれるわけがないのは分かっているが。

「でね、おにいちゃん。今、るりちゃんのお父さんは単身赴任中なんだって。だから写真を送って顔を見せてあげたら喜ぶんじゃないかな？ ってるりちゃんに言ってみたんだよ」

「そんなに長い期間ではないらしいですけど……でも、毎日私には電話をかけてくるんです。だから、今は元気にしてますって、伝えるのもいい、かなって……」

私「には」と聞くと、鴨紅さんのお母さんの立場がないような気がするが、きつと存在感の薄い俺の父親と同じようなものなのだろう。

とにかくそれは気のせいとしておいて、それだけ父親が娘を大事にしているのが本人にも伝わっているいい結果なのだろう。カメラのことは結果が微妙になっているみたいだが、それもまた、受け入れられていているようでうらやましい。ちょっとは俺の母親との関係にも取り入れたいね。

それに、美央もたまにはいいことを言うらしい。いつも鴨紅さんをいじめているようにしか見えていないわけだが、こういう一面も一応はあるようだ。できればその気遣いを俺にも向けてほしい。

……こうやって考えると、俺が家族から孤立しているとは思えないから困る。

とにかく、こういった事情を聞いたからには断る選択肢などないのだろう。美央はきつとこの流れになることまで予測して、あえて俺が事情を聞くまでカメラを渡すだけにとどめていたのだろう。

「なーに、おにいちゃん？ もう断るなんてしないよね？」

美央のしてやったりな顔が憎らしかった。

#### 14．ときどき撮影会2／準備失敗？

「ともかく、だ。このカメラじゃ操作方法もわからないし腕が持たないから、俺が使い慣れてるこのデジカメでいいかな」

デジカメをメモ代わりとしていつも持ち歩いているのが功を奏した。せめてこれだけは受け入れてくれることを期待しながら、鴨紅さんに確認を取ってみる。

「あー、おにいちゃん、そうやって自分のメモリにるりちゃんのあーんな姿やこーんな姿を残しておくつもりなんですよー」

答えを待つために鴨紅さんの動きだけを見ていた俺は、美央のその言葉で、鴨紅さんの肩や表情が固くなったのが見て取れた。

「いや、ないって。ないから。鴨紅さんも頼むからそんな顔しないでほしいんだけど」

「う、うう……そう、ですよね。すみません」

「うそだー、そうやって緊張をほぐして、ガードを甘くするって聞いたよ？」

「美央は俺をそんなに犯罪者に仕立てあげたいのか」

そもそもそれは何情報だよ。それに「あんな姿やこんな姿」って、何を指しているんだよ。そんな漠然としたイメージで動揺した俺も俺かもしれないが。

母親みたいなことを言い出した美央に文句の一つでも言ってるのかと考えていると、その中で鴨紅さんはおびえるように左肩を引いて、俺から視線を外している。小刻みに震えているようにも見えた。

状況が状況でなければ、守ってあげたくなるようなかわいらしさを感じていただろう。今ではその原因がどうやら俺みたいなのだから洒落にならない。

「犯罪者だなんて、そんなこと思ってないよ？　だっておにいちゃんがつまくやれば合意の上であんなことやこんなこと」  
「頼むからやめてくれ」

鴨紅さんの目が、襲われそうなのを覚悟しているような、上目遣いで泣きそうなものになっているのが、信用されていないように思えて悲しい。

「そ、その……あの、私、お兄さんの言うこと、なるべく聞いて頑張りますから……お願い、します」

「いや、その目で言われると俺がすごく悪者みたいになってくるんだけど」

「はわわ、ごめんなさい！　ちゃんと頑張りますから許してくださいっ」

ここまで来ると、鴨紅さんも美央に乗っかってわざとこの態度を取っているのではないかと思ってくる。

……たぶん本気での行動、だよな？  
それはそれで、俺への警戒心があるのは本当だという意味になっ  
てしまうわけだが。

「あーあ、撮影前のトークは重要なのに失敗しちゃったねー」  
「誰のせいだと思ってるんだ」

これもまた、美央はわかってやっているのだろう。  
しかし俺をからかうのはいいが、重要な「鴨紅さんの写真を撮っ

て父親に送る」の方まで影響を受けさせてどうする。

きつと、美央はそこまで考えていない。

「じゃあ、早く撮影会、はじめよー！ ほらほら、るりちゃんもいつまでもそんなに緊張してないで」

さっきまでの行動と、今言っていることの滅茶苦茶さが、俺の予想の信憑性をますます確かなものにしていった。

## 15・ときどき撮影会3 最初一枚

いつの間にか、鴨紅さんの父親に写真を送るのが目的だったはずが、美央の言葉によって撮影会となってしまうのは、気にしたら負けなのだろうか。

記念撮影程度ならともかく、女の子相手にカメラを向ける機会など、そうあるものではない。撮影会なんて言葉を聞くと、俺もそれなりに緊張してしまう。

「よ、よろしくお願いします……」

今更気づいたのだが、鴨紅さんはいまだ学校の制服姿のままだった。そして、カーペットの上で正座を崩したような……いわゆる女の子座りの格好で、カメラを持って立っている俺を見上げている。

さっきの美央のほぼセクハラまがいとも言える余計な会話もそうだが、それとは別に撮影が始まったこともあるのだろう、鴨紅さんの表情はまだ固い。油がさされていない機械のように、動きもぎこちなかった。

しかし撮らなければ始まらないので、俺はカメラを構えてシャッターを切ると、鴨紅さんの全身を切り取った結果がデジカメの液晶画面に映し出される。

それでも、おそらくここ最近まで父親からあの秘密兵器的なもので撮られているからなのか、俺が撮っても絵になっているような気がする。

笑顔でこそないわけだが、視線はカメラにしっかりと向いているし、目もしっかり開いている。

集合写真を撮ると、どうしても緊張して薄目になったり微妙に視線がそれてしまう俺のパターンを考えると、十分なように思えた。女の子だとゲーセンにあるような写真をシールにしてくれる機械で

慣れているのかもしれないが、レンズを向けられているのを意識してしまう点で、それとは違うように思う。

だがここで、どうも疑問に思うことがある。

「これなら、美央が撮ったって同じじゃないのか？」

「えー、それは違うよ、おにいちゃん。まだるりちゃんの魅力をちゃんと引き出せてないだけだよ」

美央が俺の撮ったさっきの撮影結果をのぞき込むと、首を振った。

「るりちゃん、いつもと同じじゃだめだめ！ ほら、せっつかくおにいちゃんが撮ってくれてるんだよ？ 恋人にするみたいに、ほら」

「こ、こいびと……っ」

鴨紅さんが言葉に詰まっているのを見て、俺は美央に耳打ちをする。

「何を言い出すんだよ」

「やっぱりわかってないなあ、おにいちゃん。こっいつのは王道ってやつなんだよ？」

いや、何回も繰り返すことになるが、これは鴨紅さんの父親に送るのを撮影しているんじゃないのか？

王道という言葉で騙されそうになったが、ここはしっかり鴨紅さんをフォローする。

「鴨紅さん困ってるじゃないか」

「えー？ むしろちょっと喜んでる感じがするけど？」

「は、はうつ……」

しかしせっかくフォローしているというのに、相変わらず美央が余計なことを言うので、鴨紅さんの様子が平行線のままでいる。どうやら、カメラで撮影するだけではない、大変な役目を負ってしまったように思う。気の遠くなる感覚がした。

## 16．ときどき撮影会4／恋人のように

「私、こ、こいびとなんていたことないです……からっ」

鴨紅さんが、美央にそう反論している。

不思議と、その言葉は俺に向かっていているようにも聞こえた。横目で俺を見ている気がしたからだろうか。わざわざ俺に向かって言う必要性が見いだせないので、やっぱり気のせいなんだろうけど。

「それならりちゃんが恋人に何をしたいか考えればいいんだよね？ えへへへへ」

美央の目つきが怖い。手は何かを握るようなしぐさをしているし、笑い声は急に低くなったりするし、どこのセクハラオヤジなんだって話だ。

それでも鴨紅さんは、素直に美央の話を受け止めているようで、口を少しだけとがらせながら、目を横にずらして、考え込むような形になっていた。

いや、考える必要なんてないからとアドバイスしようとすると、鴨紅さんの視線が俺に戻ってきていることに気づく。

「えっと、こうで、いいですか……？」

鴨紅さんがポーズを変える。

……それは確かに心にぐつとくるようなものかもしれない。両手を胸の前に置き、体を少しだけ前に乗り出して、その分あごをあげた形で、目を閉じている。

俺が見ているデジカメの画面から、飛び出して迫ってくるような錯覚さえ覚えた。

言うまでもなく、まるでキスするようなその体勢は、なるほど確かに魅力を引き出しているのかもしれない、が。

「これを鴨紅さんの親に送るつもりか」

「えー？　だつて、これでおじさんに彼氏ができたつて報告できるでしょ？」

「いやいや余計な火種をまいてどうするんだよ」

「はうう……やっぱり、だめですか？　こんな格好……」

一瞬、だめですか？　が、前の話の流れから、俺を彼氏にしてはだめなのかという意味に聞こえてしまった。後に続く言葉でその可能性をすっかり打ち消してくれたが。

そんなわけないって話だ。たとえ一瞬でもそう考えた自分が気持ち悪い。

「えへへ、るりちゃんかわいいー」

「ううー……」

美央が俺からデジカメを奪い、撮影したもののプレビューを自分で見ながらさらに鴨紅さんにも見せると、鴨紅さんは頬に手を当てて下を向いている。

「おにいちゃんだつてどきどきしたくせにー」

「俺を誘惑してどうするんだよ、だからこれを送る相手が誰なのかわかって言っ」

「るりちゃん、よかったねー！　おにいちゃん誘惑されちゃったつてー」

俺が反論をしようとする、すかさず話を途中でぶつ切りにされてしまう始末だ。手に負えない。

もはや美央の言っていることも鴨紅さんには届いていないらしい、  
ますますなるような声を出して誰とも目を合わせないでいた。

## 17・ときどき撮影会5／まぶしさ、再び

「でさ、おにいちやん。上目遣いが好きなのはよくわかったけど、そろそろ違う目線で撮ってもいいと思うんだけどなー」

半分あきらめの境地の俺、うつむいていまだに声にならない声を出している鴨紅さん、どちらも美央に何も言えない状態でいると、美央は容赦なく次に進もうとする。

俺の好みを確定してきた件については面倒なのでスルー扱いにしておくとして、確かに美央の言うとおり、今まで鴨紅さんが座ったところを立ちながら撮影しているので、ワンパターンなのかもしれないと思う。

「どうしろと？」

「あうあう、流された……えっと、せっかく彼氏になったんだから同じ目線になるとか？　というか、ちょっと甘える感じで下からのぞき込むとか」

「彼氏になったとか決まっている言い方には引がかかるが面倒だから処理しないでおく」

「あうあう、やっぱり放置プレイに目覚め」

「それはもういい」

とにかく、立って撮影する以外には目線を合わせるか、もしくは下から。美央は結局当たり前のことしか言っていないわけだが、もうそのあたりもいちいち指摘しないでおく。時間の無駄だとうやうきづいてきた。今更な感じもするが。

ひとまず俺はカメラを持ったまま、視線を鴨紅さんの顔に合わせながらしゃがむ。少しでも鴨紅さんを不安にさせないように、と思つての行動だったが、しかし今でも頼に手を当てており、女の子座

りだった足は前に出ていて、体に引き寄せるように縮こまっており、充分不安なオーラがまとわれている。

まったく、美央のせいで鴨紅さんはしばらく再起できなくなっているじゃないか。これこそなんという時間の無駄なんだ。

そこまで考えて、あることに気づく。

ちよつと待て。鴨紅さんが縮こまっている？　ということとは。

デジカメの画面の中には、見てはいけなはずの、しかし今日すでに見覚えのある、あの「まぶしいもの」が映っていた。

それが意味するものを考えるより早く、とつさに俺はレンズを手でふさいだ。我ながら、普段の俺に比べてらしくもない、素早い行動だったと思う。

ところが、まずいことに肝心の鴨紅さんがこの事態にまだ気づいていないらしい。今でも鴨紅さんはうつむいているので、自分で気づいてくれる期待ができない。

そして美央は、この状況に何も口を出さないつもりでいるらしい。俺が無言で美央の方を向くと、わざとらしく俺から視線をそらし、鳴らない口笛を吹こうとしていた。

美央のやつ、わかっててわざと俺を座るように促したな。

美央の魂胆にまんまとはまって、結局、どうやら俺が指摘するしかないらしい。

あいにく俺も、さすがにこのままにしておくほど鬼畜な神経は持ち合わせていない。

「鴨紅さん、か、かくして」

覚悟を決めて言ったものの、どうしても声がかすれてしまう。ま

さかこんなことを言わなければいけない日が来るなんて、予測できるわけがない。

鴨紅さんも恥ずかしいことになっているんだろうが、俺もそれに恥ずかしいものがある。

もうここまで来ると、美央のこれはいたずらではなくてほばいじめだ。

鴨紅さんが俺の言葉に顔を上げる。しばらくは何を指しているのかわからない様子で、鴨紅さんは顔全体を赤くしながらも俺に視線を合わせてきていたのだが、俺が勇気を持って、あくまで鴨紅さんの顔だけを見ながら指を下に向けていると。

「……………ひうつ！」

その瞬間、もはや声になっていないどころか、息が詰まっているような、聞いていると心配までしてしまうくらいの音が聞こえた。

かと思うのも束の間、座り方を正座にまで戻し、スカートを両手で押さえるという動きをする。鴨紅さんもまたさっきの俺と同じように、それは普段にはあまり見られない素早さだった。

目を強くつむっているらしい、まぶたがけいれんするようなくらいに震えていた。

「えへへー、シャッターチャンスだったでしょー？ 気づいた時レズ覆ってたけど、ホントは一枚くらい撮ったよね？」

「美央……わざと黙ってたな」

「ガード甘くなったでしょ？ ほらほら、今の表情とかもかわいーよ？ 写真写真」

なんだかもう、美央の一つ一つの行動に見事に振り回されっぱなしで、ほとほと疲れてきていた。

## 18 ときどき撮影会6／ひとまず休憩を

撮影をはじめてから三十分ほど経った。

だがここまでの結果として、どう解釈したところで鴨紅さんの親に見せられるほどのまともな写真が無い。よっぽど表情が固めの最初の写真が一番良い出来な始末だったりする。

何が問題かって、言うまでもなくプロデュースの仕方にあるのは間違いないだろう。

「むー、おにいちゃん？ 今わたしがダメみたいな見方してるでしょ……」

「それ以外にどう考えろと」

鴨紅さんの様子をうかがっていると、部屋の隅で立ったまま、背中を向けて一切こちらを見ていない。これは俺の幻覚なのか、渦が巻かれているかのような暗い影を落としていた。

これを作った原因が美央以外に考えられるだろうか。

……俺なのかもしれない。直接的に考えて。

「人の責任にしちゃだめだよ」

「とりあえずお前が言うな」

その前に、よく鴨紅さんも文句一つ言わないと思う。さっきから一言も発していないところからして、言えないくらいに混乱しているのかもしれない。

「仕方ないなあ、とりあえず休憩！ るりちゃん、そんな隅っこにいないで早くこっち来なよー」

だからお前が言うな、と再び言いたいところだが、二度も同じツッコミをしたら負けなんだろうか。

そんな考えが巡ったために、特に何もアクションを起こさずに動向を見守っていると、鴨紅さんが振り返り、肩をすくめて小さくなりつつ、こちらに向かってくる。

もうこれ以上無いほど赤くなった表情には、疲れさえ見えた。目を閉じてため息をついている姿が、そう確信させてくれる。

しかしこの状況でも美央の言うことを聞くとは、なんという調教…… もとい、健気だと表現するべきなのだろうか。

「お、お疲れさま、鴨紅さん」

話題も見つからず、だからといって今の出来事をぶり返すわけにもいかず、無難な挨拶をかけてみる。

「は、はい。あの、ごめんなさい……」

俺の目の前で、鴨紅さんは今度こそスカートを必要以上にか、体重を乗せるようにして両手で押さえて座り込み、挨拶に応えてはくれた。開口一番俺に謝ってくるあたり、純粹さがよく表れていると思った。

でだ。

その純粹さを守るために、俺はここでどうすればいい？

行動からして前かがみになっている鴨紅さんを見て、俺はまたも判断を迫られている。

頼むから美央、余計なことを言うなよ……

俺は鴨紅さんから視線をそらしつつ、美央に目配せをしようとし

た。のだが。

「るりちゃん、さすがー！　そうやってボタンを開けたブラウスの隙間から胸元見せて、おにいちちゃんのハートをギュッとつかんじやうのは、いい作戦だね！」

間に合わなかった。

言いやがったよ、わざわざ説明までつけて。

その後の鴨紅さんは、その胸元をおさえることに気がいきすぎたしまったりだとか、とにかく何が起こったのかは鴨紅さんの名誉のために伏せておこうと思う。

結局、まったく休憩にならなかった。

## 19．ときどき撮影会7／美央と一緒に

「なんだかりちゃん、疲れちゃったみたいだし……そろそろちょっと癒してあげないといけないよね？」

もうやだ、この妹。

美央の言い出したことに、俺はそう感想を持たずにはいられないいや、疲れさせたのは誰なんだって話だから。さつきから同じようなパターンの問答を繰り返しているが。

となると、やっぱり直接的にはその原因は俺、ということになってしまうのだろうか。

冗談じゃない。もうこれ以上、罪悪感を積み重ねたくないんだが。そもそもさつきの休憩時間がその時間じゃなかったのか。だとしても見事に失敗しているが。

「るりちゃん、一緒に撮ろ？」

「あ、えつと……」

俺の考えなどどこへやら、あまりにも急に話が変わり、突然美央が鴨紅さんの背後から抱きつく。鴨紅さんもそれで驚かないわけがないように、返事に迷いが出ていた。

ここまで散々美央に嫌がらせをされているわけだが、それでもまだ、奇跡的に嫌がってはいないらしい。

癒しって、まさかこれのことなのか。

「当たり前だよ。わたしとるりちゃんは、切っても切れない仲間なんだよ？　こうしているだけで落ち着くんだよ？」

「切りたくても切らせてくれないの間違いなんじゃないか」

「あうあう、そんなことないんだから。ねー、るりちゃん？」

鴨紅さんが首を縦に小さく一回振るのを見て、美央はそれ見たことかと誇らしげにしているようだが、この話の流れで違うなんて言えるわけがないと思う。

「んー、るりちゃん大好きだよ！」

「ひゃー！ ちょ、ちょっとみおちゃん……っ」

「ほらー、わたしたちの仲いいところ、ちゃんと撮ってよー」

「はうっ……おにいさん、撮らないで、ください……っ」

美央の行動は抱きつくだけにとどまらず、その手を鴨紅さんに這わせるようになで回すなどという行動に走り出した。

女の子同士の仲いいところを見せるつもりで美央はこうしているのだろっ。それ自体はいいアイデアだとは思うが、二人の周りに百合の花が見えそうなのこの光景は、果たして見せることができるような健全なものだろうか。

結論として、ここは鴨紅さんの言葉に従った方がいいとしか判断がつかない。というか、こんなところ撮ったら俺の趣味が疑われる。俺がカメラを下ろしていると、その間も美央にいいように扱われて小刻みに揺れている鴨紅さんの膝が、力が入らないのか徐々に曲がっていき、最後には座り込む形になっていく。

そこでようやく、止めなければという思考まで行き当たり、声が出た。

「美央、いい加減それくらいでやめとけて」

「あうあう、ちょっとやりすぎちゃったかな？ るりちゃん、ごめんね？」

止まる直前のコマのように頭を回転させている鴨紅さんを見る限り、やりすぎ加減がちょっとどころの話とはとても思えなかった。

## 20・ときどき撮影会8／取り残されるふたり

「じゃあ、私はちよつとトイレ行ってくるから、るりちゃんのことよろしくー」

信じられないことに、目を回している鴨紅さんを尻目に、美央がそんなことを言い出した。

なんというフリーダムな行動なのか。この状況を俺に丸投げとは、俺には到底できない。それを実行してしまうあたり、本当に美央とは兄妹なんだろうか、一瞬疑問に思ってしまう。

あんまりな発言に呆気にとられていると、本当に美央は部屋を出ていってしまい、俺は鴨紅さんと二人取り残されてしまった。

「嵐が去った……」

出てくる感想もそんなものしかない。美央の出ていったドアを見つめ、俺はつぶやいていた。

が、そうして目の前にある問題が解決するわけがないのは充分わかっていて。現実から目をそらすとしても、ここにうずくまっている鴨紅さんを無視しきれぬわけもなく。

ドアから目を離すと、ずっと俺をまっすぐに見ていたのかもしれない、座り込んだままの鴨紅さんの視線と交わった。ここまでの出来事を考えれば当たり前だろう、視線が合った途端、鴨紅さんの目がさらに潤みだしたり、まぶたが少し下りたりしていた。

俺としてもこんなことになった経験がないし、というかあったまるかと思うわけだが、何ともコメントしようがなくなってしまう。しばしの沈黙が続いた。

ただでさえ美央がいなくなったことで余計に強調されたこの部屋の静けさ。どうしてくれようか。

鴨紅さんが何か切り出すことはとても期待できない。ただでさえ鴨紅さんから話をするのを見たことがないのだ、ここは俺がリードするしかないだろう。

「ごめん、美央がいつもいつも」

もはやこんな謝罪も何度目になるかわからない。そろそろ使い古されすぎてちゃんと心に響かないかもしれないと、そんな不安もよぎる。

「あの、お兄さんのせいではないですから……謝らないでください」「いや、でも、色々、さ。不可抗力だったとはいえ」

その中身を説明するところまではさすがにできず、一つ一つの言葉が切れ切れになってしまう。

「迷惑……でしたよね」

「え？」

鴨紅さんの言葉に、俺は意味が分からず聞き返す。

どちらかというと迷惑をかけているのは俺と美央で、鴨紅さんが迷惑をかけていると思わなければいけない点などなかったように思う。

あ、それとも。

「いや全然迷惑とは思ってないから。撮影の手伝いをするなんてなかなかできない経験だし」

最初カメラを渡された時は渋っていたりもしたわけだが、今となつては美央の行動はともかく、撮影の部分に関して迷惑と思つては

いない。

だが、その見当は外れたらしい。

「あ、あの……そうではなくて、私なんかの、色々なの見せてしま  
って、迷惑かな、って……ごめんなさい」

非常に返答に困る話だった。

## 21・ときどき撮影会9／絵になってたから

「い、いや！ 迷惑とかそうは思っていないから！」

言いながら、俺はいつたい何をぶちまけているんだと思った。色々見せてしまつて迷惑じゃないかと鴨紅さんが聞いてきてこんな答えをしていては、まるで俺がもつと見せてくれと望んでいるみたいじゃないか。

鴨紅さんの言葉に、どうやら平静でいらなくなっているらしい。慌てて考えずに言葉を発してしまったのもよくなかったようだ。

「そ、そうですか……よかったです」

いや、何がよかつたんですか鴨紅さん！

自分の言っていることに気づいたのか、それとも俺の態度でわかつたのか、言い終わつた後に俺を見た鴨紅さんは目を大きく見開く。

「はわわ！ そのつ、違ふんです！ 見て欲しいとかそういうことではないんですっ！ ただ、迷惑じゃないってわかつただけでも……って、はうっ、そうでもなくてっ」

自分の胸の前でクロスさせながら両手を大きく振っている鴨紅さんが、妙に可愛らしく映る。

俺は、そんな素の状態の鴨紅さんに悪いとは思いつつも、その姿を切り取りたいという願望に負けてしまつたらしい。

「こ、こんなところ撮らないでくださいっ……」

「いや、ごめん。絵になつてたから、つい」

涙目の鴨紅さんに、つい笑いが漏れてしまう。その慌てぶりがなんだか小動物的というか、頭をなでたくなるような感覚に陥った。さすがにこんな鴨紅さんがあまり機嫌のよろしくないタイミングで実行に移すわけにはいかないが。いや、機嫌がよろしくても恥ずかしくてできないが。

しかし……こう考えてしまったということは、美央の鴨紅さんに対する行動を理解できてしまったのと同じな気がして、なんとも悔しいものがある。しかもなんだ、「絵になってたから」なんて、恥ずかしいことを言ってしまう始末だし。

「とにかく……今までのことは無かったことにして、さ。美央のいないうちに、ちゃんとした写真、撮ろうか」

「そ、そうですね……はい、お願い、します」

そんな自分の言葉を取り消したくて、慌てて俺は続けた。しかも、焦った余りにそれは一方的に俺の都合が良いことで。色々ずるいかもしれないと思ったが、ありがたいことに鴨紅さんも同意してくれたので、仕切り直すことができた。

無理矢理だったかとも考えたものの、ずっと沈み込んでいた鴨紅さんがようやく笑顔で返してくれたところを見る限り、充分この切り返し方は成功と言っているのかもしれない。

……もちろん、これも都合のいい解釈と言われたらそれまでだが。

とにかく、こうして無事、美央のいない隙を狙った二人だけの撮影会が始められる。わけだが……

こんな言い方をするとますます怪しいとしか感じないのは、気のせいだと思いたい。

## 22・ときどき撮影会10〰ふたりきりで撮影会

一枚、また一枚とシャッターを切っていく。

鴨紅さんが、シャッターの音一つ一つにバリエーション豊かにポーズを変える。

普段の鴨紅さんの控えめな性格からして、こういった動きは信じられないもので、どれだけ今まで撮られていたのかというのが改めてうかがえた。

首をかしげてみたり、両手を頬に当ててみたり、頬杖をついてみたり、そのまま視線を外してみたり。

まるでグラビアを見ているようで、ここまでくると鴨紅さんのお父さんの趣味を疑ってしまうほど、鴨紅さんのポージングは決まっていた。

そして、ファインダー……もとい、デジカメラらしく液晶画面に映る鴨紅さんの表情は、かなり落ち着きを戻しているように思えた。一見、良好な状況と言える。

しかし……

シャッターの音が部屋に響く。

鴨紅さんがポーズを変える。

俺が撮る位置を決める。

またシャッターの音だけが部屋に響く。

その間に会話は一切なく、鴨紅さんと共に黙ったまま、ただただその行動を繰り返しているこの状況は、背徳感のようなものをひどく感じて仕方がない。

例えば、だ。この先に考えられる展開といえば……

「な、なんで黙ってるんですか……？」

「いや、それは……」

「あ、あの！ 本当はわかってます。わかっているんですけど、まだ心の準備が、できて、なくて」

「いや、それなら無理はしなくても」

「いえ、せっかくお兄さんに撮ってもらえるんですから、私……」

「鴨紅さん……」

「綺麗に、撮ってください……」

「いやいや、これはおかしいだろ。何を最低な想像を本人の目の前でしているんだ、俺は。」

具体的なことは何一つ想像上の会話の中には出てこなかった。出てこなかったけど。どう見たっていかかわしい方向に向かっているのは自分でも否定ができない。もう自己嫌悪するしかなかった。

「あの、ごめんなさい」

「え、何が」

そうして俺が猛省モードに入っている最中のことだった。むしろ俺が言うべきことが、鴨紅さんの声で耳に届いてきた。

俺の心境を見透かされているような気がして、汗が出そうなほど動揺しているのを自分自身感じながら、聞き返してしまう。

「私なんか撮っていても、つまらないですよね……」

だが、鴨紅さんが帰した言葉は当たり前ながら俺とは違っていた。何を理由にそんなことを言わせてしまったのか、一瞬悩んだものの、少しして気づく。意識が最低な妄想に走っていた間、俺の手は鴨紅さんにカメラを向けることもせず止まっていたようだ。現実

に、俺のカメラを持つ手は目線の位置になかった。

「何も話してくれないですし……」

「え、えっと」

とはいえ、理由を正直に言えるはずもない。俺は言葉に詰まった。

「その、できれば何か話してほしいです……」

とりあえず俺の想像した展開にならなかったただけ良かった。と、  
そうなる可能性を少しでも考えてしまった自分自身に呆れながら思  
っていた。

### 23・ときどき撮影会11〜言えば言うほど

目の前では鴨紅さんがじっと、俺に期待を寄せるように何か話してくれることを待っているらしい。

お互いに向き合いながら座っていても、俺からだと見下ろすような形になる鴨紅さんが、さっきのような嬉し……いや、鴨紅さんにとっては恥ずかしかったであろう事態になるのを避けるように、胸元に手を当てながら俺を見上げている。

それは、撮影を始めた時みたいに軽く添えるようなものではなく、力がこめられているのが分かる。その証拠に、鴨紅さんの顔に赤みが差しかかっていた。

しかし、今日はずっと鴨紅さんの恥ずかしがる表情ばかりを見ている気がする。増してや思いもかけなかった出来事が起こり続けているのだ、そのおかげで俺の「理性」とやらは崩壊の一途をたどっていたらしい。

「かわいい……」

心の中でとめておくべき言葉が、声に出てしまったのだった。

「えっ……？」

まずい、と口を塞いでみたものの、言ってしまったからにはそんなことをしても無駄だった。鴨紅さんの戸惑いの声と表情が、当然のごとく俺に向けられる。

「あ、いや……そんな表情をする鴨紅さんをお父さんが見たら、かわいすぎて心配になってしまっただろうなって」

ここで何も言わないのは、どうしても不自然になる。

なので冷静に、取り繕うように言ってみたものの。

あまりに苦しい。苦しすぎる。

そもそも取り繕うどころか、口をつくように出てしまった「かわいい」という言葉に対して、ごまかしにさえなっていない。それに気づくのも、言った後ではもう遅かった。

もはや取り返しのつかないことはわかっているのだが、目の前にいる鴨紅さんの頭から煙が出そうなところを見る限り、俺も更に言い訳がましく言葉を続けざるを得なくなっていく。

「じゃなくて！ あ、えっと、充分鴨紅さんの魅力が詰まったものになったと思う！ お父さんもきつと喜ぶよ、はは……」

……もちろん、それは余計に自爆する方へと向かっていくわけだが。

「その通りだよ、おにいちゃん！」

そして、そのタイミングで部屋のドアが開けられるのは、もはや偶然ではないのだろう。

「ようやくるりちゃんの魅力に気づいたんだね！ 遅いくらいだよ…… やっぱり二人きりにすると効果あるんだねー、ときどき。無言になった時はどうなるかと思ってたけど、やっぱり通じあってるって言うのかな。ほらほらー、るりちゃん、おにいちゃんと二人になつてどうだったのかなー？」

美央が鴨紅さんの頬を人差し指でつついているのを見ながら思う。やっぱりドアの陰に隠れていたんだな、と。

### Event・3 父親のいる日

鴨紅さんは、もう父親にデータを送信したのだろうか。

始めるときにはこんな大変なことになるとは思っていなかった鴨紅さんの撮影。だがその苦労もむなしく、結局、撮ったものはほとんど使いものにならなかった。

その理由は、特別写りが悪いとか、技術的なものではない。あまりに色々と親に送るには問題があるものが多かったためだ。

それは撮影を終わらせた後、鴨紅さんとはギクシャクしながらも、とりあえずチェックはしなければならぬとデジカメをみんなで覗いて一枚ずつ見ていた時に、画面を隠されたりデジカメ自体を奪い取られたりして更にギクシャクしそうになったことから伺い知れるだろう。

美央が「えー？ いいと思うのに。じゃあこれはおにいちゃんのポケット行きだね？」とか空気の読めないことを言ってくれたおかげで、鴨紅さんと共にターゲットを美央に向けることができ、そこまで悪化することはなかったが……

そういう意味では、美央はいいムードメーカーなのかも知れない。

「そんなわけではないか」

そもそもそうなる原因を作ったのは美央だ。ムードメーカーの前にトラブルメーカーなのだ。

自己完結の最後の結論だけ口に出たためか、あることを二人で考えるため目の前にしていた俺以外のもう一人、まさしくその張本人である美央の口が尖った。

「むー、今わたしのこと悪い意味で考えてたでしょ……良い意味ならいつでも大歓迎なんだけどなー、ときどき」

「いいから真面目に考えてくれ」

そもそも何がどう「良い意味」なんだと言うのだろう。

深く掘り下げてもあまり聞きたくない答えを聞かされそうなのでやめておくとして、そう、今は何かないかと考えなければいけないそれは、鴨紅さんが父親へ写真を送るということを改めて意識して思い出したもの。

6月の第3日曜日に、所謂父の日というイベントがあることだ。

うちの父親は平日は当然のこと、休日も家にいないことが多い。平日に関しては、母親の……主に美央に関係する「攻撃」ならぬ「口撃」を、毎朝クツションも無くまともに食らっていることから分かるわけだが、平日どころか休日もさほど変わらない扱いをされていることを思うと、日に関わらず家にいないのが割と普通のことだったりする。

まあ、そんな思い出し方をしないと父親の存在を忘れるなんてのもどうなのかと、自分でも思うわけだが。

とにかく、父の日にあたる日は珍しく父親が家にいる予定らしい。こうして生活できているのも父親のおかげであることは否定できないし、何もしないのもどうかと思うので、当日のことを美央と一緒に考えようと呼んだわけだ。

「マジメに考えてないと思ってたのー？ えへへ、わたしにいい案があるよ？ おにいちゃんとはにかく、わたしの隣に座ってくれていればいいから！」

「……なぜ内容を伝えようとしなのか、気になるんだが」

「言っちゃったら、おにいちゃんは演技っぽくなっちゃうでしょ？」

「だったら言わない方がいいかなーって」

「なんだろう、すごく嫌な予感がする」

「おにいちゃん、それは武者震いってやつだよ？」

「絶対違うと思う」

「むー、せっかくおにいちやんに負担がかからないようにかわいい妹が提案してあげてるっていうのに、ひどいよ……しくしく」

「その提案を言わないから問題だってだけなんだが」

「だって言っちゃったら演技っぽく」

「以下ループでお送りしますな話にするな」

しかし結局、話はループとまでは行かないまでも、美央がかたくなに案を話そうともせず、平行線のまま父の日を迎えてしまうことになるのだった。

そして、その父の日。

仕方なく美央の言うとおりに父さんを目の前にして、美央と並んで座っていたわけだが。

「お父さんに父の日のプレゼント、というか……あのね？」

「ちょ、おい」

何を思ったか、美央は父さんを目の前にして俺の腕にしがみついたのだった。

「おにいちちゃんとわたし、こんなに仲良いんだよ？ だからお父さんはわたしたちのこと、心配しないでいいからね？」

まさか、これが父の日のプレゼントというやつなのか。

で、そんなこと言われて、俺はどう反応していいのか。そういう意味では確かに言われたとおり演技にはなっていないかもしれないが、い、が。

父さんを目の前に言われてしまった以上、ここであまり俺として

も下手なことはいえない。まずは父さんの様子をつかってみると、こめかみが小刻みに動くのが見えた。

その一瞬の挙動は、俺の背中に冷汗が流れるには充分な話で。考えてみれば、母親にこそこういうシーンを見られるのは日常茶飯時のように行われてきてしまっているが、父さんの前で見せてしまったのは初めてのこともかもしれない。

これはどうやらマズイことが起こりそうな予感がする。

とぼつちりながらも、怒られることを覚悟しなければいけない。そう思った時だった。

「すばらしいじゃないか！」

「……はい？」

なん……だと？

予想外の父親の言葉に、俺の頭が考えることを瞬間、拒否しかかっているような感覚に陥る。おかげで、声が出るまで時間を要してしまった。

「こんなに兄妹が仲良くやってくれていて父さんは嬉しいぞ！」

「いや、あの……」

父さん、腕とか絡めているのはスルーですか？

そう言いたいところだったが、立ち上がり、今にも涙を流しそうなほどの父さんの迫力に負け、言い出すことができない。

「我が家は安泰だ！ 安心してまた仕事に立ち向かうことができる！ 雄斗、美央、充分すぎるプレゼントだ。引き続き仲良くやってくれば、これ以上望むことはない！」

「えへへ、大成功だね、おにいちゃん？」

「嘘だろ……」

母親とは違う意味で、やっかいな話になってしまっている。というか父さん、母親の普段の言動は少なくとも俺にとって安泰ではないんですが……

父さんだけはまともだと思っていたのに、どうやらこの家族は全員が変だったようだ。

自分で言っておいてなんだが、この言い方ではそこに俺が含まれてしまうと気付いて嫌になった。

## 24・怪しい呼び出し

鴨紅さんの写真の一件が、無事とは言えないまでも、とにかく一段落。

その後は、あまりにも普段とかけ離れたことばかり起こっていたあの日とのギャップも手伝い、平和そのものといった日々だった。

いつものように母親に白い目線を向けられたり。

美央が飛びついてくる時に限って、あたりに人が大勢いたり。

鴨紅さんは以前にも増して目を合わせてくれない。

……全然平和じゃなかった。

そんな、自分から落ち込む方へ飛び込んでいったある日の学校の放課後のことだった。

ホームルームが終了したとほぼ同時に、一通のメールが俺の携帯電話を震えさせているのに気づいた。

誰からかなど、言うまでもない。こんなにも見計らったかのようなタイミングでメールをよこしてくる人物など、一人しか思いつかない。

『ちよつと話を聞いてほしいんだー！ 今日、予定は何もなかったよね？ だから、ゆつくりでいいからフェアリードレスまで来てね？ わたしは一緒には行けないけど、すぐに追いかけるからね！ もし来なかったら……どきどき』

「普段の話し方と全く同じなのか……」

話し言葉でしか使わないと思っていたあの語尾だが、まさか文章

にまで取り入れてくるとは。

それ以前に相変わらず俺の予定を把握していることに恐怖さえ感じてくるわけだが、下手にどうやって知ってるのか聞いたら引くような回答をもらいそうなので、きつと考えない方がいいのだろう。

と、現実から逃げようとしてみたものの、メールの内容が変わるわけでもなく。

行っても行かなくても面倒なことになること間違いなしの美央からのメールに、俺は大きく息をついた。

「いらっしやいませー！」

わざわざ電車で一駅の移動をしてまでやってきた、フェアリードレスの玄関。

この名前だと、一瞬いかかわしい店のようにも思うだろうが、実際は、簡単に言えばファミリレストランだったりする。一度だけ美央と入ったことがあり、なかなか料理も凝っていたという印象がある。

名前の由来は店の制服がかわいいから、それにちなんでらしい。美央の言うことが本当ならば、だが。

しかし、いくら気に入ったからといってわざわざ学校の放課後に呼び出すこともないだろうに……律儀に来てしまっている俺も俺なのだが。

まあ、一人でぶつくさ言っているのも怪しいだけだろうし。ひとまず入口のドアに手をかけることにする。

と、目の前に飛び込んできたのは、俺の今の気持ちとは対照的すぎて、まぶしくてその目を細めなくなるほどの笑顔を向けてくるウイトレスさんの姿だった。

嫌が応でも目を引くピンク色のワンピース型な制服に、ポニーテールの結び目やら、胸元やら、白いエプロンの縁やら、とにかくスペースに余裕があれば詰め込んでみましたと言わんばかりの場所に蝶々が舞っていたりするのだ、もはや直視もできない。もちろん、主に見ているだけでも恥ずかしいという理由だ。

さっき確認したばかりだが、フェアリード레스ってファミリールストランだったよな？ 以前に来た時も感じていたことだが、あまりにも男性客を狙っているような服装に、俺はその根本から疑いすらかけなくなる。

まあ、近くの大学で放送しているローカルラジオのDJが、スポンサーなのも影響しているのかもしれないがやたらこのウエイトレスがかわいいとプッシュするところからして、俺の予想は当たっていると言っているのだろう。

と、ある一点をあえて無視して、一通りツツコミを入れてみたものの。

どうやら、最初にツツコむべきその一点に気づかないフリをするのもそろそろ限界のようだった。

## 25・フェアリードレス

「おひとりさまですね？　こちらのカウンターの席にどうぞー！」  
「おい待て、呼びつけておきながら説明なしで通すつもりか。何か言うことがないのか」

「えー？　でもお客さまは平等に接しなさいって店長が言ってたんだもん……」

相変わらずいつも通り高めに結われたポニーテール、その大きなリボンを揺らしながら、ウェイトレスに扮した美央が口元に右手の人差し指を当てながら小首を傾げている。

だが、既にこの時点で他の客と平等に接しているとは思えない。

「どう？　かわいいでしょー？」

「話をそらすな」

「おにいちゃんって、わかりやすいよね？　言にくいことがあったら答えないよね。つまり、かわいいって思ってるってことだよな？」

「後ろがつかえてるからとりあえず席に通してくれ」

こんな状況にいてまで、美央の言葉にいちいち反論していたらキリがない。俺は言い合いになりそうなのを切り上げて、店内に歩を進めた。

なにせ、振り向いていないのにもかかわらず、いつも母親から受けているために過敏になっっているのか、あの冷たい視線のようなもので後頭部に穴を開けられそうなのだ。いつまでもとどまってはいるられなかった。

しかし、店内の客からも同じような視線を感じるのは気のせいだろうか。気づかないフリをしていたが、美央が俺に話しかけてきた

時から見られているような気がする。

「むー、せっかく驚かせようと思ったのにつまんない……」

美央が明らかに不満そうな声を上げながら、すかさず俺の前に出て席に案内する。

その一連の動きは昨日今日に身につけたものとは思えない。いつの間にアルバイトなんて始めたんだろうか。

俺が席に座ると、その疑問を見越していたかのように美央が話した。

「前におにいちゃんと服を買いに行った時、けっこうお金使っちゃったんだよねー。で、その時ここに食べに来たじゃない？ ひそかにスタッフ二名募集！ って張り紙見つけて、これだーって思ってた！」

「嘘つけ、あの時ほとんど支払いは俺だっただろうが」

「えへへ、そうだったっけー？」

「白々しすぎる……」

話しながら俺は美央にはめられた時のことを思い出す。最初から美央は俺と服を買いに行くつもりでいたにもかかわらず、わざと俺が母親に怒られるように誘導し、挙げ句の果てに支払いを全て俺持ちにしたという、とんでもない日があったのだ。

「はめられたんだみたいな顔して、人聞き悪いなー」

「事実だろうが。というか表情を読むな」

しかも当たっているから恐ろしい。

「ちょっとは悪かったかなーって思ってるんだよ？ だからお返し

しようと、こうやってバイトしてるんだよ？」

「別にもういいってあの時言っただけがするんだが」

はめられたと思っていながらも、俺もずいぶんと流されやすかつたらしい。なんだかんだ言っても、美央と一緒にいると退屈しないのは確かで、最終的にはそう言ってしまうていたのだ。

「あー、そうだよな？　だってあの時、おにいちゃんといい雰囲気になって……きゃっ」

「何もしてないからな」

美央が両手に頬を当てて体をくねらせると同時に、客の視線がこちらに一斉に向いているのが分かる。もはや気づかれないようにしてさえない。

俺は美央にというよりその他大勢の客に向けて、少し声を張りながら言っていた。

「むー、何もしてないなんてひどい……手もつないだし、腕も組んだし、それに」

「もう余計なことを言わないでくれ」

あまりにも美央が空気を読んでくれず次々と思いついてくれるおかげで、もはや止めるだけ無駄だと悟った俺は、甘んじて客の視線を受け続けることにしたのだった。

## 26 ギャラリーを味方に

「というか美央、ずいぶんと客に気に入られてるみたいだな」

「えへへー、惚れ直した？」

「できれば俺まで巻き込んで注目を浴びることはやめてほしいんだが」

「おにいちゃんだけのわたしになってほしいなんて……やっと言ってくれたね？」

「そういう考えに持っていていける美央はすごいと思う」

考えてもみれば、さっきから俺に飛んでくる視線が止まないのは、この男連中が俺に一目惚れでもしていない限り美央の人気によるものになる。

……余計なことを考えて、寒気を感じてしまった。とにかくだ。

「なんでこんなのがいいんだか……」

そう思っただった。

すると美央は一度「むー」と言いながら眉を細めていたが、その後一瞬、俺に見えないようにしているつもりなのか、うつむき加減になっているものの口元が上がったのが見えた。

これは、相変わらず俺を陥れようとしている合図と取るべきなのだろう。そして、その予想は見事的中していたらしい。

「うつ……おにいちゃん、そんな言い方ってないよー、しくしく。わたしはただ、おにいちゃんにほめてほしかったただけなのに……」

美央がわざとらしい泣き真似を仕掛けてくる。なるほど、今回は俺に対して情を訴える方向で来たか。

だが、俺も毎度のごとく流されてばかりはいられない。むしろこれは、泣き落としなんて毎回は通じないと知らしめるチャンスなのだ。

「今回は俺も騙されないぞ、そんな泣いたフリしても毎回……は……」

しかし、俺の言葉はここで先に続けることができなくなる。辺りからの、ささやくような声ながらも聞こえてくる言葉が、無視できなくなるくらいに広がりを見せていたのだ。

「おいあの男、美央ちゃんを泣かせてるぞ」

「俺たちの美央ちゃんを弄びやがって」

「あいつはなんなんだ。手に入れたら突然冷たくするなんて最低だぜ」

「おにいちゃんとか呼ばせてるし、そういう性癖のあるやつはやっぱりまともじゃねーんだよ」

……こいつらが騙されてやがった。

そもそもお前ら、ここまでのやりとりを見ておいて俺が本物の兄だという至極全うな結論は持ち合わせていないのかという話だ。

そして美央が俺に何かを期待しているような目を向けているのを見て思う。むしろ弄ばれているのはお前らなんじゃないかと。

ただ、俺もその中に含まれていると見て間違いはないらしい。この状況を無視してまでこのまま態度を突き通すことなど、今の俺にはできなかった。

「くっ……ま、まあその制服は似合ってるし美央にピッタリかもな……」

「えへへ、やつぱりおにいちゃん優しい。嬉しいなー」

美央はこれでなんとか満足したようだが、俺はというと……

「くそつ、あいつ俺たちでも言えないようなことをさらりと言いやがって」

いや、それは俺関係ないだろ。お前らが言えないだけだろ。

「美央ちゃんもまんざらじゃない顔してますぞ……あんな顔、ぼくにだって見せたことないのに」

だから俺は兄なんですけど。むしろまんざらじゃない顔してたとしたら、かなり問題あるんですけど。

「強力なライバル出現だな……そろそろ本気を出さなければならない」

ここ、一応ファミレスなんですけど。そんな本気を出す場所に適してないんですけど。

色々ツツコミどころが多くて困る。それに突き放してもほめても同じ結果になっている俺はどうすればいいのか。

公の場所だけにがつくりとうなだれてばかりもいられず、疲れはたまる一方だった。

## 27・特別な人って？

「美央、そろそろ注文していいか。なんかすごく疲れた」

俺は考えたあげく、ひとまずオーダーするという結論を導き出した。

美央をこれ以上ここに置いておく事態が悪化するばかりだろうし、今のやりとりで疲れて何か頼みたいのも事実。なので、さっさと注文して美央をここから離れさせること。俺が取った行動は、そんな素晴らしく合理的なプランなのだ。

ファミレスに來たわけだから、注文すること自体は当たり前ではあるのだが。

「あつ、ちよつと待って？」

しかし、俺の思うとおりには事は運んでくれないらしい。美央が何かを思い出したかのように斜め上を見ながら右の人差し指を立てている。

「いや、一応客んだけどな、俺。オーダーくらいちゃんと……」

「うん、オーダーは取るよ？ でもでも、せつかく来てくれたんだし、わたしじゃなくて特別な人にオーダーしてもらおうかなーって」  
「特別な人って……誰が」

なんだか、ますます辺りの男性陣を敵に回すようなことが起こる予感どころか、ほぼ確信のようなものを感じてならない。

「えへへ、おたのしみだよ？ せんぱーい！」

「美央ちゃん？ どうかしたー？」

美央がもう一人のフロア人員らしい、厨房の近くにいる女性を呼ぶ。

こちらを向いたその女性は、活発そうで、今聞いただけでもはっきりとした通る声で、とにかく人当たりの良さそうな人だった。

不思議と、どこかで見たことがあるような気がする……その答えを導き出そうと彼女を見てみると、ふと視線が合った。すると彼女はあつ、と口を開け、俺の座るテーブルまで駆け寄ってきた。

開口一番、お約束の言葉が飛んでくるわけだが。

「美央ちゃんの大切な人が来たのかな？」

「あうあう……せんぱい、本当のこと言わないでくださいよー」

美央が食事を乗せるプレートを抱え、飛び跳ねながら抗議している。俺のことを時折見てくることからして、この動作が本気での行動でないことは見えるわけだが。

とにかく、相変わらず間違ったことを触れ回っているらしいことだけは理解した。美央のことはとりあえず置いて、少なくとも否定だけはしておかないとそのまま受け取られてしまう。

「誤解を招くような言い方は止めてください」

「あうう、やっぱり私のことスルーされた……」

「あはは、いい妹さんじゃない？　ところで私のこと覚えてるかな。前に美央ちゃんと来た時に接客したの、私なんだよ」

「ああ、そういえば……」

「せんぱい、というわけで、いいですか？」

「あ、そうだね。うん、許可します。美央ちゃんはここで待ってて。呼んでくるわね？」

「えへへ、お願いします」

俺がどこかで見たことのある人だと思っていたのが解決に至ったところで、更にもう一つの疑問が生まれる。それはどうやら「特別な人」というのが彼女のことでないらしいことだ。

美央が先輩と呼ぶその人は、再び元になっていた厨房の方へと向かっていく。今の会話の流れからして、これからその答えが出るといふことなのだろう。

「お待たせー、連れてきたよー！」

再び戻ってきた彼女についてきた人物に、俺はどう反応していいのか迷った。

きつとまた、どう行動しようが反感を買うことは間違いないのだろうから。

## 28.ご注文は？

連れられてきた子には、見覚えがあった。

いや、見覚えがあるどころではないのはわかっている。しかしその人物がウエイトレスの格好をしているのがにわかには信じられないのだ。

「あ、あの……お兄さん、い、いらっしやいませ」

声を聞いて、更に確信を持つことになる。俺の目の前には、視線を下に落とし、その格好を隠そうとするかのように手を前にやってこすり合わせている鴨紅さんの姿があった。

「一応ね、ウエイトレスをやってもらう予定だったんだけど、恥づかしいってことで厨房の方に行ってもらったの。お知り合いってことだし、特別に仕事を抜け出してもらったってわけ」

そう先輩のウエイトレスの人が言っているそばで、予想通りとも言える反応が聞こえてくる。

「あいつ、俺たちの美央ちゃんだけじゃなくあんなかわいい新人まで囲んでいるらしいぞ」

「くそ……この勝ち組め、俺たちをなんだと思ってやがる」

「さぞかしここに来るのは楽しいだろうよ」

「しかしかわいいな、もちろんルックスもだが衣装もすげーな」

なんだろう、すごく居づらくなってきた。

しかし注文もすることなく出ていくことなどできるわけもなく、いたたまれない空気の中、どこに視線をやっていいか考えた末、さ

っきのヤジの最後も引つかかって俺は改めて鴨紅さんを見た。

美央はリボンこそ大量にほどこされてはいるものの、それほど肌を見せているわけではなく、むしろ着込んでいるようなものだったが、鴨紅さんのこれは……

肩のあたりは完全にその白い肌を露わにしている、かろうじて透明のストラップで支えているように見える胸周りは淡い緑色の薄い生地で覆う程度になっていて、そこに存在するものをわざわざ強調している。

美央と同じリボンが首に巻かれていて、プリーツの入ったスカートだったり……かわいいと言えはかわいいんだろうが、それ以上にあまりにもファミレスとしてはふさわしくないと感じられるその格好に、どうコメントしていいものか迷うものがある。

と、ここまで考えたところで鴨紅さんの目が明らかに色々な方向へ飛んでいつているのが見えた。

しまった！ 何を言おうか考えているうちに鴨紅さんのことをずっと観察してしまってるじゃないか！

「そうだよ、おにいちゃんのえっちー」

「何も言っていないだろうが！」

当てられてしまっているだけに、墓穴を掘ることになるのはわかってはいるのに、そこまで考えを回す余裕もなく、焦りの言葉になって美央に返してしまった。

美央がしてやったりといったようにわざとらしく口元を上げているのに腹が立つ。

「顔に出てるよ、おにいちゃん？」

「そ、そうなのか」

「あー、やっぱりえつちなこと考えてたんだー」

美央の手のひらでまんまと転がされてしまっていてるのが情けなくて仕方なくて、俺は女性陣三人もいる前だというのに腹の底から息をついた。

「おにいちゃん、これは仕方ないんだよ。るりちゃんの魅力には誰にも逆らえないんだよ」

「はう……みおちゃん、そんなことないってば……」

「せっかくのチャンスなんだからこの際おにいちゃんをメロメロにしちゃえばいいのに！」

「いい加減やめてくれ。鴨紅さんも困ってるだろ」

振り回されるほどに、どんどん俺の立場が危なくなっていくのがわかっていくだけに、美央にこれ以上好き勝手なことを言わせておくわけにはいかない。

現に、黒いオーラが店内を包み込んでいるように俺には見えた。営業妨害とも言える雰囲気だというのに、なぜか先輩のウエイトレスさんはほほえんで美央に何かを耳打ちしているし、もはや理解ができない。

「むー、しょうがないなあ。じゃあ何を注文する？ それとも……」

美央が鴨紅さんの肩を持ちながら目の前でしゃがみ、二人ともに俺を見上げる形になったかと思うと、注目されるためのとどめの一撃を放ってきたのだった。

「ご注文は、わ・た・し・た・ち？ それなら、あと二時間ほどでサービス付きでお持ちいたしまーす」

あまりのふざけっぷりに、俺はツツコミすらする気にもならなかった。ああもう注目したいならすればいいさ、と開き直りたい気持ちにさえなってくる。

「せんぱーい、効かなかったですよー」

「うーん、私の時はちゃんと効いたんだけどなー」

しかも実践済みだということに恐ろしさを感じた。

## 29・夏と言えば

「なあ、美央」

「なーに？ おにいちゃん」

「帰っていいか」

「えー？ ここまで来て帰るなんてひどいよ……しくしく」

「ここに来たいとは一言も言っていないんだが」

俺は見回す限り女性一色であるこの現場を確認しつつ、美央に最後の抵抗を試みる。

バイトが終わるまで待つてほしい、帰りに寄りたいところがあるから付き合っしてほしい。何度も離脱することを試みたものの、美央に腕をつかまれ、結局美央の最終目的地までたどりついてしまった。鴨紅さんも一緒についてきていたので、彼女と一緒に行けばいいじゃないかと言っても聞き入れてくれなかったが、この光景を見る限り、無理矢理にでも押し通すべきだったと今になって後悔する。

鴨紅さんも聞かされていなかったのか、そして今から何をしようとしているのか悟ったのか、頬を赤らめながら、声が小さくて良く聞こえはしなかったが、美央に抵抗の言葉を投げているように見えた。

「るりちゃんも恥ずかしがっちゃだめだよ、せつかくの夏なんだよ？ 夏と言えば海だよ？ 海と言えば水着だよ？」

美央があまりにもお決まりの台詞を言い放って鴨紅さんの両肩に手を置く。

すっかり放置される形になった俺は、デパートの特設コーナーでカラフルに取り揃えられる女性用水着を前にして、向かってくる女性客の視線に肩の力が抜けるばかりで。

さらには今の美央の発言によってますます注目を浴びてしまったわけで、俺はこれ以上抵抗する気も失せていた。

「ねね、るりちゃん、どんなのがいいと思う？」

「え？ えつと……みおちゃんならこの黄緑の水玉のついたビキニとか……」

「ちがうよー、るりちゃんが着る水着だよ？ ほらほら、せっかくおにいちやんが目の前にいるんだよ？ ぐつと引きつけるようなもの選ばなきゃ。これとか！」

「ええっ！？ そ、そんなの無理だよあ……」

美央が鴨紅さんに、隠す部分以外すべてヒモで構成されている水着を見せている。しかもその隠す部分もかなり面積が狭くて、その、なんというか色々とこぼれてしまいそうな……

鴨紅さんが無理だと言うのも当然だ。というのは真面目に思っていたつもりだったが、どうやら美央には別の思惑が漏れていたのを捕まえられてしまったらしい。

「ほらほら、おにいちやんが期待に満ちた目してるよ？」

「ば、バカ言うな」

普段なら違うとすぐに言っているはずのところだが、俺だって男なわけで、否定することができずに中途半端な返し方になってしまった。言い訳しようにも、そもそも今回は本当だったりするわけで、言葉に詰まってしまふ。

そんな心の内をバレないように、と思ってもそんな本音の前にはどうしようもなく、美央は目が笑っているし、鴨紅さんにもそれが見透かされてしまったようで、うるんだ目で俺をまっすぐ見ている。

「はうっ……あ、あの、こういうのがいい、んですか？」

「いや、えっと」

「おにいちゃんはこのいうの大好きだと思うよ？」

「美央は余計なこと言うな」

「じゃあおにいちゃんからちゃんとリクエストしてみたらー？ たぶんこれがリクエスト通りだと思うけどね？」

ここぞとばかりに美央が畳みかけてくる。何も言い返せないのが悔しい。

「というわけで、るりちゃんにこれ着てほしいみたいだよ？」

「そ、そうなんですか？」

鴨紅さんが俺に聞いてきたものの、どう答えていいものか迷った。ストリートに着てほしいとか言うのは露骨すぎて印象悪そうだし、かといって否定するのも、期待していないみたいない方になってしまいそうで、そもそも本心でもない。

結果的に何も答えないでいると、鴨紅さんが「わかりました」と切り出す。

「その……似合わなくても、笑わないでくれますか？」

「わ、笑わないよ」

美央に渡された水着を握りしめ、のぞき込むようにそんなセリフを言われてしまったら、キャラに似合わず顔が緩みそうになってしまつのも仕方ないのだ。しかし、そうやって押さえつけるにも限界は近い。

「えへへ、じゃあ最初に試着する水着は決まりだね？ じゃあ着替

えてこよっか」

どうやらその限界を突破する前に一息つける時間ができるようで助かった。「最初に」と言っているあたりが気にはなるが。

しかし、気を抜くにはまだ早かったようだ。

「のぞかないでね、おにいちゃん？」

「のぞかないっての」

「どうしてもって言うなら、一緒に入っても」

「ええっ!？」

「冗談はほどほどにして早く着替えてくれ」

美央が相手だと、やはり油断ができない。

鴨紅さんが相変わらず本気で俺がついてくるのかといった顔をしているように見えたのが悲しかった。

### 30・憧れのシチュエーション？

「考えてみれば、こうなるに決まってるよな……」

俺は美央と鴨紅さんが入っている試着室の目の前で、中に聞こえないよう、ほぼ心の声だと言えるほどの小声でつぶやいた。

二人が着替えに行く時は、しばらくベンチにでも座って休憩しようと思っていた。が、着替え終わったとして、試着室から飛び出して歩き回るわけにもいかないのだ。美央ならやりかねないが、俺としてはあらゆる意味で全力で阻止したい。少なくともベンチのあるような場所に来られては、確実に見せ物になってしまう。ケータイで連絡してくれと言っても、きつと聞かずにその行動を取るだろうし、そうなると俺が試着室の前に待機する他ないことになるわけだ。いざ待機してみると、予想通りというか、服の擦れる音だったり、二人の会話が聞こえてきたり。とても一息つける状況ではなかった。

「あうあう、やっぱりりちゃん、すごいよね？　どうしたらこんなにおつきくなるのかな」

「ひゃ！　みおちゃんそんなにじつと見ないでよお……そ、それにその手……」

「へっへっへ、おねーさん？　どれだけ成長しているのかこの手でしっかり確認してあげちゃうよー？」

「はう……目が怖いよ、みおちゃん……」

俺の存在など無視したようなガールズトーク。いたたまれないという言葉は、まさしくこのような時のために用意されたものだと思う。

美央もわかってやっているのだろうが、当然俺が中に入って強制的に止めるなどできるわけがなく、注意するにも外から言うことし

かできない。

「おい美央、ふざけてないでちゃんと着替えてくれ」

「むー、おにいちゃん興味の無いフリしてちゃんと聞いてるんだー？ えっちー」

「聞こえるように言ってるからだろうが」

「こういう話をしたら喜ぶかなーって」

「……とりあえず顔を出すのをやめてくれ」

話の途中から、美央は試着室のカーテンの切れ目から片方の肩ま  
でを露出した形で、斜めに顔を出していた。

それを見る限り、少なくとも上半身は水着を着用する直前の状態  
ではあるらしい。これ以上は余計なことを言わないでおくが。

それでも今こうして顔を出している以上、着替えを進められてい  
ないわけで、俺はさっさと美央を引っ込めようとした。

「えー？ 普通こういうシチュエーションって懂れるものだと思う  
んだけどなー？」

「妹相手にそんな懂れある方がどうかしてると思うが」

「むー、じゃあるりちゃんだったらいいんだー？ るりちゃん、お  
にいちゃんからご指名みたいだよ？」

「えっ、ええっ！？」

美央が引っ込んでいくと、本当に鴨紅さんを引き連れて再び顔を  
出してきた。

美央は鴨紅さんの両肩を、今度はその背後からつかんでいる。鴨  
紅さんの背中に押しつける形になっていると思うのだが、女同士と  
いうのはこんなものなのだろうか。

とりあえず、試着室の裏側が壁になっていて良かったと思う。美  
央の場合、周りにほぼ女性しかいないことをいいことに、壁がある

うがなかるうがかまわず同じことをしそうだ。

そんなことを冷静に考えていないと、気をそらせそうもなかった。シチュエーション自体が冷静さを余計に失いそうなもののようにも思えたが、そこは考えないことにしておく。

……それでも、鴨紅さんがうつむき加減になりながらその手でカーテンをつかんで、体を隠そうとしているのはまともに見てしまい、それには俺の体も反応せずにはいられなかったが。

どこがって、もちろん心臓の鼓動に決まっている。決して違う場所が反応したわけではないのだ。誰に向かって言っているんだか分からないが。

一人無駄にそんな考えをめぐらせていると、

「うう、もういい？ みおちゃん……」

「だーめ！ あっ、手がすべったー」

「きゃあ！」

「えへへ、うそでしたー」

「もう、みおちゃん！」

「ごめんねー、るりちゃん！」

勝手に一通りのやりとりをして、二人はまたカーテンの中へと入っていく。

二人が出てくるまで平静を保っていられるだろうか。ますます不安になっていた。

### 31・試着中

カーテンから顔を引つ込めた後はようやく真面目に着替える気になつたらしい、会話も布の擦れる音が変わらず聞こえてくる中、少なくとも美央の俺への嫌がらせに近い行動を仕掛けられる気配はなくなっている。

女性用の水着は当たり前だが着た経験がないので、どのくらい時間がかかるものなのかは分からないが、男のように短パン一つはけばいいようなものとは違ふのは明らかだし、変に急かすこともできない。

俺は一人、多少手に余す気持ちになりつつも、着替えが終わるのを待っていた。なんだか、放置されたら放置されたで悲しいものを感じてしまった。美央に抗議していた割にそんなことを思つてしまふのだから変な話だ。

いや、さっきのがやり過ぎなだけなんだよな。そろそろ、美央の加減をする感覚の欠如っぷりはどうにかしてもらいたい。

なにせ、鴨紅さんが出てきた時にはカーテンにピタツと体のラインが強調されて……

……まあ、悪くはなかったかもしれない。

「おにいちゃん、何ニヤニヤしてるの？」

「……はっ！ いやニヤニヤなんてしてないぞ！」

「ふーん……ホントにニヤニヤしてたんだー」

突然の美央の呼びかけに、おそらくバレバレなほどに明らかにうわずった声で受け答えをしてしまった俺は、すぐにその行動を後悔する。

声のした方向を見ても、まだカーテンは閉められたまま、顔が出てもないのだ。

「……見てもないのに適当なことを言うな」

「気づかないおにいちゃんが悪いんだよ？ さっきのりちゃんの姿が刺激的だったのはわかるけど、そんなに簡単に動揺してバレバレじゃ、嫌われちゃうよ？」

「ほつといてくれ」

いちいち美央の言っていることが合っているから困る。まったく言い返せない。

「ほつとけないよー、だって今カーテン開けて襲いかかれても困るんだよ？」

「襲いかかるわけないだろ、こんな公衆の面前で」

「二人きりになったら襲いかかつちゃうんだ……どきどき」

「頼むからこれ以上俺の評判を下げないでくれ」

どこか他の女の子の爆弾が爆発したりとかしないよな？

まあ、そんな女性の知り合いがないというところが悲しいところだが。

「さつてと、おにいちゃんをからかうのはこれくらいにして、るりちゃん大丈夫だよ、おにいちゃん襲いかからないって」

……色々突っ込みたいところだが我慢しておく。

「でも、それでも襲いかからないって言えるかな？ どきどき」

どうやらこのやりとりをしている間に着替えは終わっていたらしい、美央がまた余計なことを言い出したのと同時に、カーテンが開けられた。

### 32・お披露目

もちろん、目の前には美央と鴨紅さんがいた、わけだが。

「あ、あの、お兄さん？ どうしたん……ですか？」

「えへへ、おにいちゃん、私たちの水着姿に見惚れちゃったんだよ！ 残念だったね、るりちゃん！ 襲われなかったよ？」

「はう……そんなこと思っただけだよ……」

とどまることを知らない美央の好き勝手な言動を止める気も起らない。

確かに俺は、見惚れてしまったというか、言い方が古いかもしれないが釘付けになってしまっている。

「えへへ、おにいちゃん、似合うかなー？」

美央が俺にその姿を見せつけるように一回転したり、体をひねらせている。

背中が腰くらいまで開いている、さっき鴨紅さんが勧めていたような、明るい黄緑色のワンピース。よっぽど好きなのだろうか、ウエイトレスの時に散々あったのにも飽き足らず、その胸元に白いリボンが一つ。

活発的な美央らしいといえらしい、というか、美央が着るとみんなそう見えてしまうのかもしれないが。

「というか子供っぽいのか？」

「おにいちゃん、なにか言ったかなー？」

「いや何も」

どうやら気にしているらしい。

「あ、あの、お兄さん、どう、ですか……?」

堂々としている美央とは対照的に、鴨紅さんがその姿を隠すように手を前にやっている。

ここまでの流れは、もうほとんどファミレスの時と同じことをしているような気がしてならない。

「るりちゃん、隠してたら感想も言えないよ? ほらほらー」

「はう! みおちゃん、だめ……っ」

美央が鴨紅さんの背後から、羽交い締めをする格好で腕を取っている。半ば強引な動きのおかげで、鴨紅さんの最も主張している部分が大きく弾んだのを見てしまった。

……決して見逃さなかったという表現にはならない。これは不可抗力だ。ボールのようにその弾みは一回だけにとどまらなかったところまで確認してしまった以上、そう言っても説得力は無さそうだが。

とりあえず、視線がこちらに来ていなかったのは救いだった。美央は鴨紅さんの行動を抑えることに集中しているし、鴨紅さんはその美央のいる後ろに向いている。どうやら気づかれずに済んだようだ。

「えへへー、マシユマロなんだよ? うらやましいでしょー、かじってみたい?」

「えっ、みおちゃんマシユマロなんて持ってたの?」

全然済んでなかった。美央の目はその二つ以外にもあるんだろうか。

結局俺が選んだことにされてしまった、鴨紅さんの純粋さを思わせるような白い色で統一されながらも、大胆さがかなりのものな小さなビキニ。胸の間は一個の金色のリングでつながれていて、その場所をのぞき込んでいるような感覚に陥ってくる。そして懸念していたとおり首の後ろ、ウエストの両脇、おそらく背中も、とにかくヒモで結ばれた状況には、横を向いたら一体どんなことになっているんだろうと疑問が沸いたものの、思うだけしかできず、言う勇気が出ない。

それでも、正面から見た感じでは……

「ど、どうですか……？」

「うん、に、にあって」

「るりちゃん、一回転しないとよくわからないよ？ ほらほらー」

「わっ、あわわっ」

「いや！ いい！ そこまでしなくていい！」

確かにさっき思っていたことを美央が言葉にしてくれているわけだが、全力で止めた。見ているこっちが恥ずかしくなる。

「みおちゃん……やっぱり、似合わないって……」

「違うよ、おにいちゃん照れてるだけだって！ そのまま腕に抱きついたりしたらイチコロだよ？」

卒倒するという意味ではな。頼むからけしかけないでくれ。

しかし、今日はいつもに増して美央の勘が冴えすぎている気がする。その姿が姿だけに、ただでさえ落ち着かないんだから、これ以上は勘弁してほしい、のだが。

「えへへ、今日はおにいちゃん隙だらけだね？ 楽しいなー、わく

わく」

むしろ恰好のターゲットになっているだけだったらしい。

そうして一通りお披露目も終わると、美央と鴨紅さんでお互いの  
を見せ合いだしていた。

「みおちゃん、ワンピースすごく似合ってる……」

「えへへー、ありがと！ あのねるりちゃん、水着はまずはワンピースだと思うよ？ 次に行くときにビキニで。日焼け跡にぐっとくるんだから。るりちゃんもそうする？」

「わ、わたしは日焼けすると痛くなっちゃうから……」

「あ、そっか！ るりちゃんのお肌すべすべだもんねー、うらやましいなー」

「そ、そんなこと……」

ようやく俺抜きで会話が始まったことにほっとしていたが、やはりそうはならないらしく。

「それにしても、おにいちゃん」

無理矢理にでも、美央は軌道修正をするようなやつだった。

「あんまり私たちが水着になっても反応しないよね？ だって下着と同じようなもののなに」

「何を言い出す」

「あ、わかった。ちらつと見える方が好きなんだよね？ 今度はこの上に制服着てこようか！ るりちゃんもきつと」

「あ、あの……その……それでも恥ずかしいですけど、どうしても、  
ってことでしたら……」

「やらなくていいから。鴨紅さんも考えなくていいから」

鴨紅さんが確実に美央の影響を受けてきているのが心配で仕方がない。

### 33・よりかかられて

結局試着は一着だけにはおさまらず、あれだこれだと何着も着替えていくのを結局俺は端で見守ってしまった。

……いや、見守るといつても別に覗いているとかじゃないぞ？

次々と見せられた水着自体のインパクトは、最初の鴨紅さんを越えるほどではなかったものの、美央と鴨紅さんのいちやつきつぷりというか、まるで俺をいないことにでもしているんじゃないかと思えるようなガールズストークなんか繰り広げられてしまっでは、たまったものじゃない。鼻血の一つでも吹き出しそうになるのを最後まで耐えることがなんとかできたのだった。

内容など、とても俺の口から言えるものじゃない。言わせんな恥ずかしい。

解放されたのは、もう日が沈んでのことだった。

しかし、そのまま解散というわけにはなるはずもなく。

神経を削られまくった俺は、引きずられるようになりながら、当然のように帰りの電車も付き合わされていた。

「えへへ、楽しかったねー」

「う、うん……あの、お兄さん、なんだか疲れてそうですけど大丈夫ですか……？」

「あー平気平気！ おにいちゃん、きつとわたしたちのセクシーさにメロメロきちゃってるだけだから」

「大声でそんなこと叫ぶな」

「えー？ 事実なの？」

「もうやめてくれ……」

偶然にも三人並んで座ることができた一列に七人掛けできるシー

トで、横にいる鴨紅さんを挟んで向こう側にいる美央の声が届くらしいのだ。俺としてはたまったものではない。

目の前に立っている人へ視線を向けたら、速攻でそらされた。…うん、見知らぬ人からの評価が早速順調にガタ下がつてくれているらしい。あんまりな状況に泣きたくなくなる。

だが、こんな最悪な状況でも、ただ一つだけ助かっていることがある。

距離があるおかげで、俺の鴨紅さんとは逆隣の状況に、美央が気づいていないことだ。

気づいていないと断言できるのは、なぜなら…俺の肩に頭を乗せて眠っている同じ年代くらいの女性を見て、美央が何も言っていないわけがないからだ。

俺が座る時、同じ駅の別のドアから乗り込んでいたらしく、同時に着席していたことだけは覚えている。顔は良く見えなかったが、座った時からすでに俺の方に向けて船を漕いでいたので、寄りかかれられないだろうかと心配はしていたけど…

いや、別に寄りかかれるかもしれないと思ってここに座ったというわけではないぞ。これはたまたま俺が三人の中で列の先頭にいたから奥に詰めて座っただけで、不可抗力なのだ。言い訳がましいが。

しかし、こうやって寄りかかられてみると思った以上に軽いというか……嫌がらせのように全体重を乗せて押さえつけてくるような会社帰りのサラリーマンとは全く次元が違う。

なんというか、香水もそうだけど、女の子特有のいい香りが鼻をくすぐり、電車のちよつとした振動でも動くロングの髪の毛が肌をくすぐり、この近さでないと聞こえないくらいの小さな寝息が耳をくすぐり……そうされていると安心するというか、俺までその眠りの世界に誘われそうというか……

つくづく、美央にバレなくて良かったと思う。今の俺は、その誘われた眠気とこのシチュエーションのおかげで、どんな顔をしているかわからない。

「えっと、お兄さん、その……」

まあ、鴨紅さんにしっかり見られてしまったわけだが。

### 34・気まずい時間

「あ、あの……」

しつかりと女性に寄りかかられている状況を見られてしまった俺に対して、鴨紅さんは俺をまっすぐ見たかと思えば、視線をそらしてまた違う一点を見るの繰り返しになっている。

おそらくというか間違いなく、その視線の先は自分の反対にある俺の肩に向いているのだろう。しばらく俺の顔と肩へ視線が交互に向いていたのを感じていたが、時折どちらでもなく、うつむいたりもしている。

俺としても鴨紅さんをフォローしたいところなのだが、だからといって乱暴に女性を起こすわけにはいかず、ゆっくりと寄りかかっている肩を下に引き抜こうとする。

「は、はは……まいったよな、こんなに気持ちよさそうにしてたら起こすわけにもいかないしさ」

我ながら白々しい言い訳をしていると思った。

なにせ自分が言ったセリフ通りだとしても、その相手がくたびれたサラリーマンの男だったりしたらどうだろう。起きようがなんだろうが、即突つつくなりして元に戻す行動に出るのは間違いないのだ。

とはいえ、さすがに鴨紅さんに見られてまでこの状況を維持したいと考えるほど、俺も神経は太くないわけで。

俺は鴨紅さんに顔を向けたままに、引き抜いた肩に加えさらに体を離すように試みしてみる。

「ひゃっ……!」

「あ、ご、ごめん！」

鴨紅さんの視線が一度俺から外れ、その腕と体を縮こませるようにしながら身をよじる。

……鴨紅さんのわき腹に肘が当たってしまった。

その跳ね返すような柔らかさと、夏の暑さもあつてじんわりと熱が伝わってきたのを感じたわけだが、とてもそんなことに浸ってられないような状況ではない。

「い、いえ……平気です……」

「いや、あのさ、こうやって離れようとしてもついてくるし、どうすればいいのかわからないな」

まったく、どうしてこういう時に限ってこんな嬉し恥ずかしなシチュエーションが続いてしまうのだろう。俺が離れようとしても、隣の女性の首の傾き具合が更に増すだけにしかならず、むしろ深く俺の肩へと入り込んできている。

誰も干渉しないようなタイミングならこれ以上ないほどの至福の時間なのかもしれない。しかし今はそんなことを楽しむ余裕もなく、ただ気まずいだけではない。

鴨紅さんは自分を抱えるようにしながら、俺と視線を合わせずにただ黙り込んでいる。今やるべきことは、鴨紅さんにどう言ったところで言い訳っぽい言葉を連ねることなのか、とにかく肩にかかる心地よい重みから離れることなのか。髪から漂う甘い香りもくすぐって、何一つ判断することができないのが困る。

まったく事態が好転しない。俺がどうしようかと無い頭を回転させているうちに、鴨紅さんに沈黙を突破させてしまった。

「あ、あの……交代してくださいっ！」

「……え？」

「その席、私と……その……」

「あ、ああ、そうしようか」

どうしようか考えている途中だったのもあって、鴨紅さんのその提案にしばらく答えられなくなってしまった俺は、返事に詰まってしまった。

### 35・視線の先

「もしかして、迷惑……でしたか？」

立ち上がり、鴨紅さんが俺の今まで座っていた場所へ横にずれたことを確認して座り直すと、鴨紅さんが俺をうかがうように、一瞬だけ俺を横目で見てまた視線を外すという行動をしながら質問してきた。

「え？ そんなことないけど、なんで」

「今、ちよっと名残惜しそうな気がしました」

鴨紅さんの頬が少し膨れているように見えるのは気のせいだろうか。というか気のせいであってほしいと思う。このままでは鴨紅さんがいるというのに他の女性にうつつを抜かしている図になってしまう。

俺は内心焦りながら、というか声がうわずりかけているのは十分に焦っているのかもしれないが、少しでも言葉を続けようとする。

「そんなことないって。助かったよ」

「さっき返事に詰まっていたみたいですし……」

「いや、それは色々事情が」

結果、言えば言うほど言い訳っぽくなってしまった。

しかも困ったことに、さっきのどつちつかずな状況を考え込んだことが、かえって鴨紅さんに不信任を抱かせてしまったらしい。

これでこの事情を聞かれたら、もう正直に答えるしかないかと、俺は覚悟を決めていた。下手に取り繕おうとしてもボ口を出すだけなのは目に見えている。

『いや、すぐ離れようとはしたんだけど、鴨紅さんにどう言おうかというのも気になって、すぐに答えられなかったんだ。ごめん』

……うわ、自分で考えておいて何だが、ものすごく嘘くさい。

頭の中にシミュレーション失敗という文字が繰り返され、俺が違った意味の覚悟を決めた頃だった。

俺の心配は無駄だったかのように、鴨紅さんは何も言わずにいる。相変わらず、視線が俺の顔に向いていないけど……

……いや、違う？ 俺の方に向いてはいるように見える。

目よりももっと下の……鼻ではない、口でもない、首でもなくて。ということは、もしかして。

俺がようやく鴨紅さんの視線の行き先に気づいた時。

「あの、失礼します」

空いたはずの俺の肩が、また埋まった。

### 36・トリプルアタック？

「やっぱり、こんなことされると迷惑……ですか？」

鴨紅さんは見上げた格好で俺の肩に頭を乗せたまま、さつきも聞いたような質問を投げかけてくる。

そんな鴨紅さんに対して、俺はその質問に答えるところではなくなっていた。心臓がのたうち回るくらいの勢いで跳ねている。それはもう、肩を通じて鴨紅さんに聞こえてしまうのではないかと心配になるほどだ。

上目遣いは美央に散々やられていたこともあって慣れていたと思っていたが、そう見ることにない斜めの角度からというのはまた違う感覚で。

こんなに細くて大丈夫なんだろうかと思わせるほどの細かな息づかいを耳に感じ、身をよじりたくなるほどくすぐったい。

「いや、迷惑ってわけじゃ……」

周りの目がなければむしろ歓迎したいくらいだ、などと口に出して言う勇氣はない。

「私が、代わりに」

「え？」

「その……お兄さん、残念そうな顔をしてましたから。私なんかじゃドキドキさせられないかもしれないですけど、それでもよかったら……」

え、俺そんなに残念そうにしてたんだろうか。むしろ鴨紅さんにそう解釈されてしまったことが残念かもしれない。

ただ、鴨紅さんのその気持ちは単純に嬉しかった。  
鴨紅さんも嫌がっているわけではなさそうだし、俺は何も言わず、  
そのまま……

「あのさー、おにいちゃん？」

と、鴨紅さんの方ばかり見ていた俺は反対側からの視線を忘れて  
いたことに今更気づく。

「なーんかるりちゃんとラヴい雰囲気出してるみたいだけど、わた  
しもいること、忘れてない、よね？」

おそろおそろ美央の方を向くと、顔こそ笑っているように見えた  
ものの、とても機嫌がいいようには感じられないオーラがあった。  
どんなことを考えているのかを考えるのも恐ろしかった。

「おにいちゃん、やっぱり忘れてたんだ……しくしく。もう怒った  
もんねー」

「バ、バカ！ お前まで寄りかかってくるな！」

「ふんだ、るりちゃんはよくてわたしはだめなんだー」

「いや、さすがに二人同時は」

両肩を埋められてしまい、身動きもできなくなった俺がどうしよ  
うもなく声だけで抗議していると、

「ふふ、美央ちゃんにはこんな手強いライバルがいたのね」

思いも寄らぬところから声をかけられた。

えっと、俺の耳が正常ならば。

今の鴨紅さんの更に向こう側、つまりさっき俺が座っていたとこ

ろの隣で、要するに俺に寄りかかってきた人のところから聞こえてきたような。

「そうなんですよー亜美さん！　なんとかならないですか？」

しかも美央は普通に会話している。まさかすでに気づいていたということなのか。

冗談じゃない、そうだとしたら恥ずかしいにも程がある。

「でもなー、私が寄りかかってても全然どうにかしようとしていなかったし？　これは私にも脈があると思った方がよかったです」

「そ、それは誤解ですよ……」

あの時の店員さん、とまで口から出かけたが、もはや声にする気力も残っていない。

彼女が顔を上げたのを見て、俺もようやくその正体を理解する。

そこにいたのは、以前美央に連れられて一度だけ行ったことのある、美央がひいきにしている服の店の店員さんだった。

美央が亜美さんと言ったが、彼女は今にもいたずらしますよ、というようなわかりやすい顔をしていた。

「ええ？　誤解なの？　だってあの時私、あなたの彼氏に立候補しちゃおうかな？　と言ったはずなんだけどな」

「な……あれ本気で」

「おにいちゃん、どうということなのかなー？」

なにこの両肩は妹とその親友に寄りかかれ、その向こうからは俺に告白みたいなことをしてくるなどという修羅場みたいなシチュエーションは。

「本当に立候補しちゃうのかな？」

その亜美さんの言葉に。

「「「やめてください！」「」「」

俺と美央と鴨紅さん。

三人の声がはじめて揃うのだった。

今でも処理し切れていないのに、トリプルアタックとか勘弁してください。

俺は切実に、そう願うほかなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8801j/>

---

ダブルアタック！

2010年11月13日00時10分発行